

「新会堂感謝記念講演会」の講演集の刊行にあたって

大野キリスト教会宣教牧師 中澤啓介

大野キリスト教会は、神様から新会堂が与えられたことを感謝し、たくさんの記念行事を企画している。音楽会、バザー、朗読劇、バンド演奏会、日本キリスト教史の講演会、原発問題学習会など、実に多彩である。教会員が皆、自分のしたいことを申し出て、自由に行ってよいという、何ともユニークな企画である。「記念行事」などという古臭い言い方ではなく、「ウエルカム・フェス」と呼ぶ。面白い教会だ。

企画委員会は、その中に 3 回シリーズの「神学講演会」をも加えてくださった。2 時間たっぷりの講演と、その後 2 時間の神学的ディベートというプログラムである。4 月 16 日(水)を皮切りに、4 月 23 日、5 月 7 日の 3 回にわたる講演会である。

信徒を対象に、教会で神学講演会や神学セミナーが開かれるというのは、ちょっと珍しいのではないかと思う。神学は神学校や学会で論じられるもの、一般にはそんなふうに考えられている。でもそれは違う。20 世紀最大の神学者カール・バルトは、自分の神学をわざわざ「**教会教義学**」と名づけた。神学は、教会が教会のためになされるものと考えてのことである。そのような意図にもかかわらず、バルト神学は、大学の神学部や神学校で論じられただけで、教会のレベルにまで降りてくることはなかった。とても皮肉なことである。

神学は本来、神学校や学会で研究されるようなものではない。牧師や司祭たちが、教役者の資格を得るため学ぶようなものでもない。本当は、一人一人のキリスト者が、毎日の歩みを真剣に送っている中で生まれ、育まれてくるものである。ヨブは、「人とは何者なのでしょう。あなたがこれを尊び、これに御心を留められるとは」と叫んだ(ヨブ 7:17)。同じ叫びを詩篇の作者も発している。

人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。

人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。(詩篇 8:3、144:3)

「人とはいったい何者なのか。」我々は、人生のいろいろな場面で、このような哲学的な問いにぶつかる。この深遠な問いかけが神に向かうとき、それは神学となる。神学とは、このような問いかけから始まる。しかもそれは、やがて、自分の生き方を根底から変えてしまうものとなる。いってみれば、神学とは、この世界に他に類例を見ない、極めてラディカルな学問なのである。

先日(2014 年 1 月 29 日)の国会で、ある野党党首が、国の集団的自衛権を巡る論議の中で、「私は神学論争をする気はない」と演説していた。数年前も、当時の日本の総理が、「私は無駄な神学論争のようなことはしたくはない」と述べていた。なぜ彼らは、「神学論争」という言葉を、神学とは無関係な話題の中で好んで使うのか。「神学」のしの字も知らないくせにと言いたいところだが、ちょっと冷静になって考えねばならない。一般の日本人にとっては、神学は「無駄な論議」の代名詞なのである。いったい何時頃から、この世界は神学を「無用の長物」と見なすようになったのか、神学に関心をもつ者は、厳しく問わなければならない。

キリスト教神学者の多くは、なぜか神学のゲッターに閉じこもっている。哲学者や科学者、文学者や評論家、政治家や企業人の方々と対話ができない。この世界に起こっている諸問題に関われないのである。学者だからといえば聞こえはよい。だが、皆、専門分野主義から抜け出せないだけなのだ。旧約学だ、新約学だ、福音書研究だ、宣教学だ、教会史だ、などと別れていて、一般社会とのレレバンシー(relevancy)をもてないのだ。牧師や司祭なども、伝統的な教義や宗教的儀式に固守するのに精いっぱい、社会に発言することはほとんどない。たとえ発言していても、キリスト教社会の内部に対してのみである。キリスト教会には有能な若い人々がたくさんいる。それだけに、とても残念である。

2011 年 3 月、東日本大震災が起こった。それは、未曾有の被害をもたらした。被災地には、親しい仲間の牧師

たちがたくさんいる。少なくとも 50 人ほどの牧師には、エホバの証人問題のことでこれまでお世話になった。JPC 時代からの、40 年以上お付き合いしている友人牧師も 10 人ほどいた。教会堂が流され、仮設住宅に住むことを余儀なくされた牧師家族も数人いた。悲惨の極みである。

私自身は、地震や津波、原発事故などの直接の被害者ではなかった。だが、私の信仰と神学は、この震災によって完全に打ちのめされた。これまで奉じてきたキリスト教神学では、このような自然災害に対処する術(すべ)はない。西欧の伝統的キリスト教神学は、自然災害を(究極的には)人間の罪に起因すると考える。これでは、災害多発国日本に生きるキリスト者にとっては、到底承服できない。自分の神学に、認知的不協和が爆発してしまった。認知的不協和を抱いたまま信仰をもち続けることは、私にはできなかった。

何らかの解決策が必要だった。その道は、一つしかない。神学のパラダイムシフトを試みることである。信仰のパラダイムシフトではない。神学の、である。自然災害を包含できる神学へとパラダイムシフトしない限り、私自身は、自分のキリスト信仰を貫くことはできない。こんなせっぱつまった思いで、被災地を訪問し続けた。

「被造物管理の神学」は、そんな危機意識から生じたものである。この神学によって、自然災害の問題を解決できた、などと言うつもりはない。ただ、私の頭の中でうずいていた認知的不協和は、徐々に、本当に徐々にではあるが、解消されていった。この「被造物管理の神学」が他の人々にも役立つのか、実は今でも分からない。ただ、私はそれで納得した。そして、私を納得させてくれる神学は、今のところ他にはない。もし誰かが、他の神学を提示して私を納得させてくれるなら、今すぐにでもその神学にパラダイムシフトする。躊躇することなど、一つもない。

そんなふうになりながら、機会あるごとに、この神学を分かち合ってきた。東北教役者会をはじめ、さまざまな教派の牧師会、超教派団体の学習会、シンポジウム、あるいはいくつかの神学校から、お招きをいただいた。どこに行っても、私の証として、この神学を語らせていただいている。

今までのところ、多くの方々から好意的に受け止められているようだ(私のところに入ってくる情報なのだから、当たり前のことではあるのだが)。でも、とにかく、ほっとしている。私の提唱する神学が認められつつあるから、というのではない。それはまだ、やっと話題に上り始めたという程度である。そうではなく、同じような問題意識をもっているキリスト者がたくさんおられるのを知ったことである。そのような方々は、自分の直面している問題に真正面から取り組んでいる。私流の言い方になってしまうが、彼らこそ、被造物管理の神学に生きている人々である。

これまで私は、宇宙に関して7つの講演をしてきた(これは、2冊の小冊子にまとめられている)。それとは別に、キリスト者の歩みについて8つの講演をしてきた(これらもまた、別の2冊の小冊子にまとめられている)。本小冊子の3つの講演を含め、これらの講演原稿はすべて、近いうちに「大野キリスト教会のホームページ」に掲載されるはずである。自由にダウンロードし、用いていただきたいと思う。個人は言うに及ばず、教会であっても、学校であっても、その他どのようなところであっても、お役にたてばこれほどうれしいことはない。踏み台でも、捨て石でも、何でも構わない。もし、何らかのレスポンスをいただければ、私にとっては大きな励ましになる。辛口の批判こそ、大歓迎である。私には、どうしてもそれが必要である。

これまで講演原稿を小冊子にまとめるにあたっては、たくさんの教会の方々の協力をいただいている。お名前を挙げて感謝を表したいのだが、皆さんそれぞれが、ただ自分の賜物を生かして主にお仕えしているだけだとおっしゃる。マタイの福音書6章3-4節の言葉を覚えて、そうしないでおく。神様が豊かな報いを用意してくださいますように…。その中の一人、10 年来の信仰の友、小堀洋志兄が、教会の機関誌に次のような一文を寄せてくれた。私の意図をととてもよく代弁してくれている。紹介させていただきたいと思う。

教育セミナー傍聴記(今なぜPS64神学なのか?)

2013 年の大野教会の教育セミナー“被造物の管理の神学講演3(A-3)”は、場所を相模大野駅ビルのボーノの会議室に移して11月30日に行われた。少し遅れて会場に着くと、すでに用意された椅子はほぼ満席。大野教会の方々の熱心さと期待感がひしひしと感じられる。

受付で、カラフルな表紙の厚い講演集を受け取る。被造物管理の神学=自然1, 2, 3編。A1古代の宇宙観、A2中世・近代の宇宙観、A3宇宙の始まりとある。

2011年、あの東日本大震災の数カ月後に行われた神学セミナーにおいて、中澤先生は大震災がもたらした被災の悲惨な状況に加え、ある種の神学的な問＝なぜ神は？との問いに答える必要があると話された。従来のキリスト教神学ではこの問いには堪えられないとして、この被造物管理の神学の重要性を説いた。

あれから、僕らはこの無謀ともいえる冒険的神学の旅にほうりこまれている。

被造物管理の神学では長すぎるということもあり、僕は勝手にこの神学をPS64と呼ばせて頂いている。(PS追記を参照ください)

大震災からの問いかけ、

東日本大震災では、巨大津波が多くの壊滅的被害と犠牲者をもたらした。そして、あつてはならないはずの原発事故が追い打ちをかけた。震災から2年と9カ月が経つ今となると、原発事故さえなかったら復旧、復興はもっと早く進めることが出来たであろうという思いが強くなる。想定外という言葉が何回も使われた。この年の流行語大賞であるかのように。

震災のあとキリスト教団体はいち早く海外からも救援、復旧・復興にかけつけた。勿論国内からも幅広い支援。相模原からも、そして中澤先生個人も何回も足を運び救援物資を届け、被災された人々や、牧師先生、教会を助けて来られた。

それでも、クリスチャン故のなぜ？という問いは僕たちの間で、決して答えのない呻きとして発し続けられたように思う。しかし、ある意味、これは実に不思議なクリスチャン故の問いと言えよう。

けせん語訳聖書で有名な山浦さんは、被災地ではこのような無意味な問いを呟いている人は皆無とまで言っている。

近年驚異的な発展を遂げる科学からの挑戦的な問いかけ

一方、科学とキリスト教の問題は将来の教会、伝道を考える上で避けて通ってはならない課題である。今までの神学セミナーで僕らは、リスボン大地震の時のキリスト教の災害への対応を学んだ。啓蒙主義の時代に自然災害を回避した神学は、その後の科学の目覚ましい発展に対して目を閉じ、耳をふさいできたようである。

福音派の聖書信仰もいつしか聖書に書かれていることは神のことばとしてどんな科学的な事実をも超越する真理として絶対化してきた。

21世紀の現代に生きていながら、18世紀、いな15世紀的な科学レベルの世界に住んでいるクリスチャンが多いのではないのかとPS64は鋭く問いかける。

短い(若い)地球を信じ、進化を頭から否定してきた神学、信仰をこの先いつまでも続けられるとは思えないのも事実である。一方で毎日の実生活においては、太陽は東から西へ動き、地球は平らだとして生活しているのも事実である。実生活に於いては、僕らは間違いなく天動説の世界、平らな地球を生きているのである。

自然科学と信仰との関係では、躓きや拒否的反応が一番強く起こるのは、やはり進化論に関してであろう。地動説、宇宙の始まり(創造)、宇宙の膨張、それはなんとか乗り越える。だけれど進化論はあり得ないというクリスチャンはごちごちの創造論者でなくても多いのではないだろうか？

PS64神学はこの問題をも正面から取り上げていく。

なぜという問い

僕たちは、なぜ神は？と問うことよりはキリストの贖いにより罪から救われ、永遠の命を授かり、ともに相続権を与えられたキリスト者としてはなにが出来るか？という問いに変えられる必要があるようである。

そして、一人ひとりが悩み、考え抜く先に何かが見えてくるのではないのか？ 誰か偉い人や、教派、教団の教えをそのまま個人の信仰の中心に置くのではなくあくまで個人の責任で。

それゆえ、PS64の中澤神学にたいしても、それを鵜のみにすべきものではないことを肝に命ずる必要がある。

さあ、一步を踏み出そう

PS64の第一歩である自然1～3が突然というかやっというべきか、僕らの前に姿を現わした。中澤先生に言わせれば、遺言(のようなもの)とのこと。しかし、僕はむしろ先生からの挑戦状として受け止めよう。

トータルで64篇にもなるというPS64. これからの歩みに付き合うためには、それなりの覚悟が必要であろう。M兄弟はこのPS64勉強会をすでにたちあげたと伝え聞いている。いずれは、インターネット上の検索で膨大なヒットがくるようなものに化けるかも知れない。多いに議論し、意見を交換していきたいものである。

僕はというと、まっしぐらに疾走する先生のあとから、のこのこ付いて行くサンチョ・パンサであり続けたいと思っているのかもしれないが。

PS(追記):PS64とは、現代のキリスト教はパラダイム・シフト(PS)が必要であるという中澤神学で、 $8 \times 8 = 64$ 編に分かれている膨大な神学のこと。読みかたは、PS64(ピーエスシックスティフォー)と読む。

この傍聴記は、私が考えていることを見事に見透かしている。気味が悪いほどだ。本音で神学を論じ合える友は、生涯の宝物である。私には、そう言い得る教会員がたくさんいる。だから、いつも世界一幸せな牧師だと思っている(私の知っている牧師のほとんどが、皆そう思っているようなので、ちょっと残念だが一笑-)。

さて、この小冊子は、被造物管理の神学の三冊目である。ここには、3つの講演原稿が収録されている。

一つ目は、「世界はどのように造られたのか」という(4月16日の)講演である。これは、神が創世記1章をとおして示された「世界創造」の記録を、一句一句追いかけて解説している。ああ、創世記1章か、これまで何度も読んだ、もう読まなくても分かっている、そんなふうを感じるキリスト者は少なくないと思う。でも、そのようには言わないでいただきたい。この講演では、これまで他のどこにおいても聞くことのできなかった解釈を提供する。創世記1章は、現代に生きる我々を含む全キリスト者のために(for)書かれたものである。しかし、我々に向かって(to)書かれたものではない。古代中近東の文化圏に生きた、最初の読者たちに向かって書かれたものである。このような確信から、すべてを丁寧に解説している。あなたの信仰の歩みに、宇宙の創造者が深く関わってくださっていることを実感するはずである。

二つ目は、「宇宙創造の全貌に迫る」という(4月23日の)講演である。創世記1章の講演を基にしながら、聖書全巻から「宇宙創造」の奥義に迫っていく。特に、古代中近東の文献と比較しながら、新たなパースペクティブの下に、聖書の宇宙論を展開する。従来の研究は、聖書の出来事に類似した記録(例えば、創世神話とか、洪水伝説、バベルの塔の話)を古代中近東の文献に見出すと、すぐ両者の依存関係を問題にした。しかし、古代中近東の文献と聖書のメッセージは全く異なっている。両者の依存関係はほとんどない。だが、とても不思議なことだが、両者には共通事項がたくさんある。なぜか。両者の読者層が共通の文化的背景に生きていたからである。このような見方をすると、聖書のメッセージは、従来の読み方よりはるかに鮮明に浮かび上がってくる。

三番目は、「聖書の正しい理解を求めて」という(5月7日の)講演である。伝統的なプロテスタント神学では、聖書論は神学のプロレゴメナ(序論)として、最初に登場する。ところが、被造物管理の神学では違う。最初に宇宙の話をして7回も続けた。それからやっと、聖書に入った。なぜ、このような経緯をたどったのか。この経緯そのものが、実は、被造物管理の神学の本質を表わしている。この講演では、従来のどの神学の教科書にもふれていない、聖書に関するさまざまな疑問点を明らかにする。ありきたりのものですませたくはない。私はこれまで50年以上、「聖書は誤りのない神のことばである」と告白し、信仰の歩みを続けてきた。これからも、その告白に生きていく。私の信仰と教理と神学のすべては、この聖書信仰にかかっている。内実の乏しい観念的聖書論では間に合わない。現代のキリスト者が本当に必要としている、どんな批判にも耐えうる聖書理解を提示したい。

この度もまた、ずいぶん長いまえがきになってしまった。それでは、創世記1章の解説を始めることにしよう。ご自分の頭のタイムスイッチを3,300年ほど前に戻していただきたい。

えっ！ 宇宙創造の話でしょ。もしそうであれば、138億年(物理学者の間では、昨年から137億年ではなく、138億年とすることに統一した)前に切り替えるのではないのか、そんなふうにおっしゃる方がおられるかもしれない。138億年前、というのではない。確かに、3,300年ほど前に、である。宇宙の始まりにではなく、モーセの生きた時代にである。その理由は、これからの講演を聞いていただければ、納得していただけたと思う。

Are you ready? Let's go!!

A. 自然

8. 世界はどのように造られたのか

(創世記 1 章のメッセージに聴く)

はじめに

本日は、大野キリスト教会の献堂感謝記念の神学講演会にご出席いただき、心より感謝する。私にとっては、この新会堂は、まさに夢のような神様からのプレゼントである。

私は、東京のお茶の水のOCCで20年間 JWTCのクラスを開いてきた。今後は、大野キリスト教会でこのクラスを継続する。引き続き、皆様のお祈りとご支援をお願いしたい。

挨拶はこれぐらいにして、早速本題に入りたい。これまで我々は、物理学や天文学の視点から、宇宙を見てきた。これからの3週連続の神学講演会では、視点を全く変え、聖書から「世界の創造」について考えたい。

本講演では、「宇宙の創造」と「世界の創造」を区別して論述している。こういう区別をしている人が他にいるのかどうか、私には分からない。ただ、このような区別をするなら、これからの議論がとても分かりやすくなる。「宇宙の創造」とは、138 億年の広がりをもつ広大な宇宙の創造のことを考えていただきたい。「世界の創造」とは、人間の目に映る身の回りの世界の創造のことである。前者についていえば、古代人、中世人、近代人、現代人の間には大きな違いがある。ところが、後者の方は、いつの時代の人間も、ほとんど変わらない認識をもっている。

この世界、あるいは宇宙の創造に言及している聖書箇所は、たくさんある。しかし、創世記 1 章は、何といってもその代表的なものである。詩篇や箴言、ヨブ記やイザヤ書などにも興味深い記述は数多くある。だが、創世記 1 章に勝るものはない。今日は、その創世記 1 章に集中する。他の箇所は、来週取り扱うことにしよう。

1. 七日間の創造のタイトル(創世記 1:1-2)

説教でも、講演でも、最初の滑り出しはとても重要である。聴衆は身を乗り出し、今か今かと胸をときめかしながら話し手の最初の言葉を待っている。その緊張感に応えることは、話し手にとっては冥利に尽きる。それは、書物にとっても変わらない。創世記の著者は、神のことばである聖書をどんな言葉で始めるのか、興味津々である。

初めに、神が天と地を創造した。(1 節)

地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。(2 節)

初めに、神が天と地を創造した。いったい、これ以上にふさわしい聖書の開巻劈頭の言葉はあるだろうか。誰もが知りたい事柄を、単刀直入、そのものずばりで切り込んでいる。

これは、古代中近東の文献と比較すると、一目瞭然である。紀元前 2,000 年期あるいは 1,000 年期のメソポタミアの文献では、まず神々の誕生から話が始まる。そして、その神々が互いに戦い、争う。その戦いが終わると、やっと創造の話になる。しかもそれは、どの神がどの領域の支配権を奪うのかという、まことに血なまぐさい話である。強い神々ほど、重要な部分を支配する。このような混沌とした世界が、メソポタミアの創世神話の背景である。エジプトにおいては、状況は少々異なる。そこでは、死や葬儀、生命の再生などに関わる話が多い。世界創造の話にしても、エジプトのアトム神の体から世界が生まれてくる、というような話になる。

このような古代の文献に比べると、創世記の崇高さはダントツである。その気高さと孤高の輝きは全く比較にならない。創世記は、神の誕生や存在については一切ふれない。当然実在するものという前提で、いきなりその神による創造が始まる。神はこの宇宙を造られた。その宇宙を見て、神がいかなる方かを悟れ。これが聖書のスタンスである。パウロは、「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められる」と述べている(ローマ 1:20)。そのとおりである。神は今も、同じことを語り続けている。

新改訳聖書は、この1節を独立した文章として訳している。新共同訳をはじめ、ほとんどの翻訳聖書も同じである。しかし実は、文法的には、「神が天と地を創造したその初めのときに、地は茫漠として・・・」と、2節の従属節として訳すこともできる。著者の意図はどちらだったのか。この種の問いに答えるのは、容易ではない。最終的には、著者に聞いてみなければ分からない。でも、そうやってしまっただけはおしまいである。何とか推測し、とりあえずの答えを出さなければならない。

創世記全体には、「トレドート」という言葉が11回出てくる(このことについては、次週詳しく話す)。そのいずれもが、それに続く出来事のタイトルになっている。しかもそれは、執筆の際に利用された資料のタイトルのようなのだ。その言葉が最初に出てくるのは、2章4節である。ということは、2章4節以降50章までは、11の資料が集められたもの、ということになる。

ところで、1章1節から2章3節までは、明らかに一つのまとまりをもっている。すると、創世記全体は12の資料から構成されていることになる。12という数字は、イスラエルの12部族を表わし、完全を表わす。2つ目からの資料にはいずれも「トレドート」のタイトルがあるのに、最初の資料にタイトルがないのは、いかにも中途半端な感じがする。タイトルはもともと12の資料全部にあった、そう考える方が自然である。とすれば、1章1節は2節に従属する文章ではなく、最初の資料のタイトルだったことになる。従って我々も、多くの翻訳聖書同様、1章1節を独立文として理解しておこう。

聖書の解釈は、著者がその箇所において言わんとする意図を正確に読み取ることである。読者が、自分の考えを聖書本文に読み込むことではない。理論上はそのとおりである。ところが現実には、著者の意図がすぐに分かるわけではない。違う解釈が可能な場合も、いくらでもある。そのようなときは、与えられている情報の中で、著者の意図を推測する以外にない。時々、そのような作業は人間的過ぎると、不信の目を向けるキリスト者に会おう。だが、それは避けて通れない。むしろ、そこに聖書研究の面白みや楽しみを見出し、聖書信仰の醍醐味を味わっていただけたらと思う。

1節をタイトルとした場合、2節の位置づけが問題になる。1節に結びつけて読むのか、それとも3節以降に結びつけて読むのかという点である。

まず、3節の「神は仰せられた」という言葉に注目しよう。二日目以降、著者は常に、この言葉をもって一日を始めている(6、9、14、20、24節)。すると、一日目もまたこの言葉をもって始めた、そう理解するのが自然である。さらに、4節と5節の「やみ」は、2節の「やみ」を受けている。6節と7節の「大水」も、2節の「大水」を受けている。つまり2節は、一日目と二日目の創造の原材料を提供している。そうすると、2節は3節に結びつけるより、1節に結びつけ、2節の「茫漠とした地」は1節の創造の結果生じた、と考えねばならない。そう理解しない限り、2節の「茫漠とした地」は、永遠の昔から存在していたことになる。それは、キリスト教の「無からの創造(creatio ex nihilo)」という伝統的な考えに矛盾してしまう。

このように創造が1-2節と3節以降の二回(あるいは二段階で)行われたと解釈すると、1節は二番目の七日間の創造のタイトルにはならなくなる。これでは、トレドートと同列に見なすという先の提唱は、おかしいことになる。むしろ、1節を、最初に起こった創造を伝えると同時に、最初と二番目の七日間の創造のタイトルを兼ねている、と屁理屈を言えば、何とか弁明できたことになるだろう。だが、何ともすっきりしない。もっと、別の解釈はないのか。ある。確かにある。古代中近東の人々の考え方を導入すれば、この問題は簡単に解決する。この読み方を、聴衆の皆さんに会得していただきたい、そう思って本日の講演をしている。

まず、1節は1章2節から2章3節までの「七日間の創造」のタイトルである。すると、2節の「地」は永遠の昔から存在していたかのように見えるが、これは、古代中近東(シュメール、アッカド、ウガリット、アッシリヤ、バビロニア

など)の人々の創造理解を無視した時に起こる問題である。彼らの創造論においては、物質の起源が問題にされることはほとんどなかった。彼らは、自分たちの目に映る世界は既に存在するものというところから出発していた。その起源について問うことはしなかった。むしろ、その世界に属するそれぞれのものが、どのような役割を担っているのか、どの神によって支配されているのか、そのことを問題にしていた。

創世記 1 章(本講演では、今後は創世記 1 章 1 節から 2 章 3 節までをこのように略して言うことにする)の著者は、このような古代中近東の思考パターンの中で生きていた。その最初の読者たち(あるいは、聞き手たちだったかもしれないし、暗唱して礼拝した人々だったかもしれないが)もまた、同様だった。彼らは神と契約を結んだ神の民だった。唯一の神ヤハウェを信じていた。神の恵みと祝福の中に生きていた。だが、彼らは、カナンに生きる民だった。天のみ国ではなかった。古代中近東の文化圏の空気を吸っていたのだ。

我々現代のキリスト者は、創世記 1 章を、宇宙の起源の奥義が啓示されているはずだと期待して読む。人間の誰も立ち会えなかった宇宙創造の奥義を明らかにしているのが聖書である。そういう啓示があつてこそ、聖書が聖書であることの権威なのだ、そういう暗黙のコンセンサスがキリスト者の間にある。そういう考え方は、宗教の世界では当たり前のことである。私自身も、そういう中に 50 年以上身を置いてきた。だから、よく分かる。だが、それは幻想である。そこから解放されるには、創世記 1 章に真正面から対峙することである。もしそうするなら、これまで決して聞こえてこなかった神のすばらしいメッセージが、天からのシンフォニーとして聞こえてくるはずである。(私の声は、だみ声で、聞くに堪えないとは思いますが 一笑一)

古代中近東の世界に生きていた著者は、宇宙の起源などには到底思いをはせることはなかった。そういう意味では、彼もまた時代の子であった。彼は、自分の目に映るいろいろなものが、人間の生存にとってどのような役割を果たしているのか、その点に興味を持っていた。ヨハネの福音書 1 章 3 節やコロサイ人への手紙 1 章 16-17 節は、キリストが万物を「無から創造」されたことを教えている。だが彼は、そのような啓示を受けてはいなかった。「無からの創造」などという神学議論には、全く無縁だった。

テレビのクイズ番組に出たつもりで考えてほしい。我々が住む「地球」と「空」と「太陽」と「月」と「星」とはいつ頃造られたのか。6,000 年前、46 億年前、138 億年前。以上三択から答えよ。さて、皆さんの答えはどのようになるだろうか。そして、その理由はどうしてなのか、考えてほしい。

ついでにもう一つ質問させてほしい。今から 3,000 年以上もの昔、古代中近東に住んでいた人々は、もし上記のような質問をされたら、どのような答えを出しただろうか。

たぶん皆さんは、そんな無茶な、分かるはずないでしょ、と答えるだろう。何か、文献でも調べればヒントぐらいは見つかるかもしれないが、…。大体、彼らがそんな疑問をもつことはなかっただろう。そんな変な質問はいい加減にしてほしい、そういう応答になるのではないかと思う。

今日は、2014 年 2 月 8 日(土)である。ここ関東にも、昨夜から雪が深々と降り続けている。45 年ぶり的大雪だという。私は朝からずっと祈っている。明日は日曜日だ、教会の礼拝に出席したい、皆さんとお会いしたい、自然を支配している神様、どうぞ雪がすみやかにやみすように、と。勝手な祈りだと思う。でも、本音の祈りである。朝から一度も、雪の降るメカニズムがどのようなものか、などとは考えなかった。天気予報は気にしたが、それ以外のことはあまり考えなかった。

古代中近東の人々もまた、同じだったことだろう。天候は、彼らの生活にとって死活問題だった。彼らは、今年も太陽が適度に照らし続けてくれて、雨が適度に降ってくれるようにと、祈ったはずである。豊かな収穫が得られ、放牧している家畜たちがよく育ってくれることを祈っていた。彼らの宗教は、たくさんの神々が誕生したと説いていた。この神々は、この世界のどの領域を支配するのかをめぐって争った。その結果、一番強い神が他の神々を従え、それぞれにいろいろな分野を担当させた。彼らにとって、天候を支配する神が誰なのかは重要なことだった。天候のことはその神に祈らなければならない。間違ふことは、神々の怒りを買うことになるのだ。彼らにとって、どの神に、何を、どのように祈るのか、それこそ最重要事だった。

我々は学校で科学的な教育を学んでいる。ところが、科学的な問題意識は、古代中近東の人々にとっては無縁なことだった。創世記 1 章の著者も読者も変わらない。我々が問題にしているようなことは意識の中に浮かんで

くることさえなかった。彼らがそのような問題に踏み込むことはなかったし、その能力もなかった。神の御霊は、そのような問題意識や回答を与えようと、靈感の働きを用意されたわけではなかった。彼らの文章の中に、我々の求めている答えを読みとろうとするのは、お門違いの願望に過ぎない。

創世記 1 章が明らかにする六日間の創造作業は、この世界の一つ一つを、人間との関わりにおいて説明するという意図のもとで書かれた。それは、コンピュータを前に仕事をしている人が、そのコンピュータを新しく使いたい友人に、コンピュータの説明をしているようなものである。バッテリー、キーボード、画面、演算装置、ソフトウェア、電話機能、サーバーの情報管理などの一つ一つの役割を、丁寧に説明することだろう。しかし、その素材の一つ一つとか、工場で組み立てられていく順番を説明する人はいない。コンピュータを使う人には、そういうことは必要ないからだ。誰が説明するにしても、このコンピュータを使う人の身になり、その人が必要とすることを説明するはずだ。神がこの世界を説明するときも、同じような思いで啓示されたに違いない、私自身はそう思っている。

話がわき道にそれてしまった。しかしこの問題は、キリスト者が創世記 1 章を読むとき、初めに解決しておかねばならない問題である。これまでキリスト教界は、カトリックあるいはプロテスタントを問わず、あまりに長い間、このような根本的な問題を未整理のまま、創世記 1 章を読み続けてしまった。その結果、神が意図されたメッセージをこの世界に伝えず、宗教と科学の無駄な対立をまき散らすという愚かなことをしてしまったのである。

では、これまでのところをまとめておこう。

1 節は、創世記 1 章、七日間の世界創造のタイトルである。

2 節は、七日間の創造の素材になるものを提示している。

3 節以下 2 章 3 節までは、七日間の創造の記録である。

では、1 節の本文をたどっていくことにしよう。

初めに(プレシート)は、通常「一年の始まり」(申命 11:12)とか「王の治世の始まり」(エレミヤ 26:1)など、時間の始まりを指す。ここでは、2 節以下の、世界が創造される以前の「その瞬間」を指している。哲学的に言えば、時間は物質の変化や繰り返しがあるとき初めて生じる。その瞬間までは、この世界には何もなかったのだから、時間そのものもなかった。そういう考察は、我々にとって大切である。だが、著者にそのような哲学的な思考を求め、あたかも著者がそのようなことを言おうと意図していたかのように言うのは、行き過ぎである。この世界が始まった時、それはすべての物事の始まりである、その程度の直感的理解は、古代の人々であっても、中世の人々でも、現代人でも分かる。**初めに**というのは、そういうニュアンスの「初め」である。

神(エロヒーム)は、単数形の「神(エル)」に複数を表わす「イーム」を付加した言葉である。つまり、神は複数形で表現されている。ところが、続く動詞の「創造した」は単数形である。このように神をエロヒームと複数形で、動詞を単数形で表わすことは、旧約聖書全巻をつうじて見られる現象である。聖書は唯一の神を説いている。従って、動詞の単数形の方は正しい。では、なぜ神を複数形で表わしたのか。そういう習慣だったと言ってしまうとそれまでである。この問題については、26 節でもう少し深く突っ込んでみよう。今は、唯一の神が複数形で表現されていることには、何かの奥義が隠されているのかもしれない、その程度のことを心に留めていただければと思う。

この**エロヒーム**と呼ばれる神は、別の呼び名をもっている。「ヤハウエ(主)」である。この神名が祈りの中で使われるようになったのは、エノシュ時代までさかのぼる(創世 4:26)。文献としても、最初のトレドット(創世 2:4-4:26)に既に現れている。そこでは、「神である主(ヤハウエ・エロヒーム)」が 20 回、「主(ヤハウエ)」が 10 回、「神(エロヒーム)」が 3 回出てくる。つまり、神の二つの名前は、人類の初めの頃から使われていた。現代の聖書批評学は、神名によって資料分析をしていく。このような学問的研究方法は、文献学的にはかなり有効な部分もある。しかし、違った名前を一人の神に併存して使うことは、古代中近東の文献においてはごく普通のことである。資料分析は、テキストの一つ一つを慎重に扱い、総合的な判断をしなければならない。

この「ヤハウエ」は、「ある(ハヤー)」という動詞のヒーフイル形(実現するの意味―出エジプト 6:2-5)が語源である。神の民イスラエルは、「ヤハウエ」を契約を実現してくださる神というニュアンスで、固有名詞のように使っていた。それに対し**エロヒーム**という神名は、「万物の創造者あるいは支配者」というニュアンスで、超越的・絶対的な神を表わすときに用いた。

神が天と地を創造したの天(シャマイーム)とは、地から見た「空」とか「天」を指す。**地(アレツ)**とは、人間が住

むこの地上のことである。この「天と地」という表現は、聖書中に 51 回出てくる(5 回は順序が逆で、「地と天」となっている)。その内の 18 回は、「神が造られた」というニュアンスの「世界(宇宙)」である。他には、法廷証人、神をほめたたえる主語、神が活動される場、諸法則をもっているものとしての「世界(宇宙)」などがある。なお、この 1 節の**天と地**は、2 節の「地は茫漠としている状態」から、3 節以降の「六日間で人間の生存し得る状態にまで整えられていく世界全体」を指す。

ヘブル語には、二つの極端な言葉を合わせて全体を表す「メリスムス」という表現法がある。例えば、2 章 17 節の「善悪の知識」や 3 章 5 節の「善悪を知る」の原語は、「善と悪の知識」が直訳で、「善から始まって悪に至るまでのすべての知識」を意味する。従って、ある学者は、この創世記 1 章 1 節を「初めに神は、すべてのものを創造した」と訳している。**天と地**を「すべてのもの」と訳すのは、古代中近東の人々の生活感覚からいうと、とても自然なものだった。

創造した(バーラー)は、この創世記 1 章の記録では、他に 5 回出てくる。21 節において鳥と魚の創造(1 回)、27 節において「神のかたち」に造られた人間の創造(3 回)、2 章 3 節においては、全体をまとめた創造(1 回)に対してである。この語は、植物と動物に対しては使われていない。神が地に、植物(11-12 節)や動物(24-25 節)を生み出すように命じたことと関係があるのかもしれない。

この「バーラー」は旧約聖書に 48 回出てくるが、その主語は、常に神である。この動詞の目的語は世界(宇宙)が 10 回、一般的な民が 10 回、特別なグループの民が 6 回、特定の個人が 5 回、被造物が 2 回、暗闇などさまざまな現象が 10 回、宇宙の地図の組み合わせなどが 3 回、きよい心が 1 回などである。必ずしも物質とは限らず、あいまいなものもある。この言葉自体には、「無からの創造」というニュアンスはない。既に存在するものを材料にして新しいものを創造する、というのが普通である。この 1 章 1 節においても、七日間のわざをまとめた、タイトルとしての創造である。

ヘブル語の**プレシート(初めに)**と**バーラー(創造する)**は、最初の 3 文字が同じで、連続して出てくる。これは「言葉遊び」である。創世記 1 章 21-22 節、27-28 節、2 章 3 節、5 章 1-2 節などには、「バーラー(創造する)」と「バラフ(祝福する)」の二語が並置されている。両語の最初の 2 文字は同一で、ここにも「言葉遊び」が見られる。古代中近東の人々は、現代人よりはるかに詩的表現、言葉遊び、さまざまな文学的技法に大きな関心をもっていた。彼らのユーモアのセンスや感性の豊かさを味わう余裕が出てくると、聖書を読む楽しみは倍増する。

では続いて、2 節に進もう。

創世記 1 章 2 節は、3 節以降の世界創造の背景説明である。創世記の著者は、このような手法を繰り返し用いている。例えば、3 章では、最初の 1 節において「蛇の狡猾さ」を説明し、その後蛇が人間を誘惑する出来事を展開する。4 章でも、最初の 1 節において「カインの誕生」を説明し、その後カインの生涯に起こった出来事を詳述する。そのような見方を拡大すれば、この 1 章の創造記録は、2 章以降の人類の歩みの背景説明となっている。同様に、創世記は、出エジプト以降のイスラエル民族史の背景説明になっている。

地は茫漠として何もなかったの地は、1 節の「地」を受けているかのように見える。その場合は、「天」に対応する「地」となり、自分たちが住んでいる地球を指していることになる。しかし、1 節の「地」と 2 節の**地**は、言葉は同じだが、意味している内容は異なる。1 節の「地」は、「天と地」というメリスムス表現における「地」である。ところが、この 2 節の**地**は、3 節以降の創造の原材料となるものを指している。その原材料はやがて、大空、地球、太陽、月、星などに割り当てられていくことになる。

茫漠(トーフー)は、聖書に 20 回出てくる。その内 11 回は、イザヤ書である。**トーフー**は「目的がない」とか、「漠然としている」という状態を指す。砂漠の砂嵐に会い、前に進めないような状態に近い(申命 32:10、ヨブ 6:18 では「荒地」と訳している)。**茫漠**というのは、なかなかの名訳である。

何もなかった(ボーフー)は「準備ができていない」状態を指す。この直後に**大水**が出てくるので、**何もない**という訳語はちょっと戸惑う。**ボーフー**はいつでも**トーフー**とペアを組み、他ではイザヤ 34 章 11 節(虚空と虚無)とエレミヤ 4 章 23 節に出てくる。この両語は、リズムカルに韻を踏んでおり、言葉遊びが見られる。1 節冒頭の「プレシート(初めに)」と「バーラー(創造した)」の二語も、リズムカルな韻を踏んだ言葉遊びだった。著者は、この種の文学的技法を多用し、創造の記述を楽しんでいる。

新共同訳は、この二つの言葉をまとめ、「混沌」と訳している。二語を一つの言葉で訳すのは構わない。ただ、

「混沌」と訳すのは、何らかの問題が生じて混乱しているかのような印象を受け、いただけない。この二つの言葉は、六日間の創造以前の**地**が、人間生存のための準備ができていない状態を述べている。預言者イザヤは、この**茫漠(トーフー)**という言葉を見事に使いこなして地球の創造に言及している。

天を創造した方、すなわち神、地を形造り、これを仕上げた方、すなわちこれを堅く立てた方、これを茫漠としたものに創造せず、人の住みかにこれを形造った方、まことに、この主がこう仰せられる。「わたしが主である。ほかにはいない。」(イザヤ 45:18)

イザヤはここで、「茫漠としたもの」と「人の住みか」を対比している。これは明らかに、創世記 1 章 2 節の「地が茫漠としている状態」と六日間で人間が住む世界に整えられていく状態とに言及している。両者があまりに類似しているので、第二イザヤは創世記 1 章を前に置いて記したと推測する学者がいるほどである。

やみが大水の上にありのやみ(ホシェク)は、旧約聖書には 80 回ほど出てくる。この語には、二通りの意味がある。一つは、光が神に関わりがあるのと同じように、「やみ」は悪、罪、サタンなどに関係しているというものである。やみの道(箴言 2:13)、神の裁き(出エジプト 10:21)、神が与える苦悩(イザヤ 9:1)などがこの用例である。もう一つは、そのような道徳的、霊的な意味を含まず、単純に「明るさの無い状態」をいう。この箇所の**やみ**は、次の 3 節で光が創造されるので、「光のない状態」のことである。

その**やみ**には、**大水(テホーム)**が覆っている。**やみと大水**は、ここでは、ほとんど同義語である。**テホーム**の直訳は「深い水」で(創世 7:11、49:25、出エジプト 15:8、詩篇 104:6 など参照)、旧約聖書には 36 回出てくる。通常は、「混沌とした世界」や「深淵」を意味する。ここでは、これから人間の活動舞台になる世界を生み出す素材を指している。二日目には、上下に分かれた水となるので、この箇所の**テホーム**を**大水**と訳したのは適切である。

世界創造の源を「水」とする考えは、ニップル出土のシュメールのテキストや、エヌマ・エリシュ(バビロニア神話の創世記叙事詩)などに見られる。また、「ティアマト」神が、マルドゥク神によって滅ぼされた死体から天と地を造っていく話がバビロニアの文献に載っている。多くの旧約学者は、この 2 節の**テホーム**が「ティアマト」神と関連していると考えている。その場合は、創世記の神がバビロニアの神々に勝っていることを教えていることになる。その可能性はないとは言えない。しかし 2 節は創造以前の状態が淡々と描写されたもので、混沌とした神々の世界の話までを読み込まない方がよい。

神の霊が水の上を動いていたは、六日間の創造が**神の霊**の働きによることを示唆している。**神の(エロヒーム)**という言葉は、「神の」とも、「神性的な」とか「超自然的な」とも訳すことができる。**霊(ルーアッハ)**についても、「風」、「息」、「霊」などに訳しうる。すると、「神からの風」、「超自然的な風」、「神の息」、「神の霊」などの解釈が可能となる。最近の旧約学者たちは、古代中近東の文献(例えば、エヌマ・エリシュ 1,105-10)を根拠に、「超自然的な力」とか「激しい突風」などと訳す傾向がある。しかし、**神の**という表現は、1 節の「神」と同じ言葉であり、創世記では常に「神」を表わしている。「超自然的」とか、「激しい」などと形容詞的に訳すより、**神の**とストレートに訳す方がよい。

ルーアッハは、これから人間の住処を建てあげていく働きに関わっているわけである。風や嵐だと、大水を破壊していくというイメージが強くなる。従って、「息」とか「霊」と訳す方がよい。エジプトの神性的な「カ」が、この箇所の「神の霊」に近いと指摘する学者もいる。2 章 7 節には、「神がいのちの息を吹き込むと、生きものになった」と記されている。人間の創造には「いのちの息」が必要だった。詩篇 104 篇は「あなたが御霊を送られると、彼らは造られます。また、あなたは地の面を新しくされます」(詩篇 104:30)と歌っている。これらのことから、**ルーアッハ・エロヒーム**は「神の霊」と理解するのが、適切である。

むろん、**神の霊**と訳しても、著者が三位一体の第三位格なる聖霊に言及している、という言い方には慎重であった方がよい。三位一体に関する啓示は、新約聖書まで待たねばならない。著者や最初の読者たちも、三位一体の神という認識はなかっただろう。しかし、旧約聖書の随所に、神の霊的な働きは強調されている。新約聖書の時代になると、御霊なる神は明確に啓示される。旧約聖書時代は、その準備段階だった。従って、この創世記 1 章においても、御霊なる神という含みをもたせて、神は特別に啓示されたと考えてよいであろう。

私自身は、キリスト者として、宇宙創造の御業は、三位一体の第三位格なる御霊のお働きだったと信じている。その最大の根拠は、この 2 節に、**神の霊**が登場してくることである。むろん、ユダヤ教や聖書批評学者の世界においては、そういう解釈は邪道である。しかし、聖書信仰者にとっては、そこまでいかないう聖書解釈は不十分の誹

りを招くであろう。

水の上を動いていたの動いていた(ラハフ)という動詞は、申命記 32 章 11 節では、「わしが雛の上を舞いかけろ」という訳語があてられている。この語は、旧約聖書ではこの二箇所にしかな出てこない。ところが、「アクハットの叙事詩」(1360 年頃のカナンから出土した叙事詩)には、この語は 3 回連続して出てくる。そのいずれもが、驚が高く舞い上がるというイメージを伝えている。このような使用例から、この 2 節においても、神の御霊が「地球と大空の素材になる大水」の上を、秩序ある世界を生み出すために活発に飛び回っていた、と理解するのがよい。この世界のすべてに今日のような秩序をもたらしたのは、神の御霊の全能の力だった。

世界の創造の準備は整った。さあ、いよいよ七日間にわたる神の創造のわざを、一日、一日追いかけていくことにしよう。その前にちょっとだけ時間を取り、我々自身も、この創造記事を読む心の準備をしよう。

創世記 1 章の著者は、神がこの世界を整えていく姿を明らかにしている。その頂点は、人間が「神のかたち」に造られ、神が休まれたことにあった。ところが、現代のキリスト者は、著者のこの意図を読み取れず、全く別の読み方をしている。大抵は、宇宙の創造過程が明らかにされているものと、期待して読んでいる。宇宙の成り立ちに大きな関心をもっているからである。聖書は神の啓示なのだから、長い間科学が疑問にしてきたことに答えてくれているに違いない、そんな美しき誤解に基づいて、創世記 1 章に近づく。そういう誤解は、なぜ生じたのか。キリスト教神学の歴史と、教会の教職者たち(つまり、聖書や神学の専門家たち)が造り出させたものである。

今から 3,300 年以上もの昔、神は、世界創造の出来事を啓示された。古代中近東の片隅に住む神の民イスラエルに、創世記 1 章の著者を通して。彼らの世界観は、周辺諸国のそれと大差なかった。著者は、そのような神の民に、「神とこの世界」との関係性を明らかにする責任を負わされた。その責務は神信仰の根幹に関わる重要なものだったので、著者は神の御霊の導きを受けながら世界創造の記録をしたため、創世記の冒頭に置いた。

神はまず、古代中近東の文化圏に生きる神の民に(to)、神の御心を啓示された。だが、それだけにとどまらない。どの時代に生きる神の民のためにも(for)、その啓示は記述された。とすれば、時代的要素は最小限に抑えられなければならない。創世記 1 章の著者は、彼の生きる文化圏の真ただ中で、この創造の記録を書いた。仲間の民の誰もがよく分かるよう、注意深く書く必要があった。困難は山ほどあった。だが神は、彼ならそれができると見込んで、その使命を託した。彼はそれに答え、最新、最高の表現技法を用いて執筆した。聖霊は、彼の働きのすべてを助けてくださったのである。

古代中近東の人々は、宇宙の起源や成り立ちに関心はなかった。そういう問題を詮索すらしなかった。現代人は、対極の道を歩んでいる。現代科学は、宇宙の素材の問題に異常なほどの関心をもっている。それに対しキリスト教神学は、「無から有の創造(creatio ex nihilo)」という回答を用意した。しかしそれは、創世記 1 章の主要なテーマではない。神は、そのテーマに答え得る聖書箇所を別に用意された。この点に関しては、続く講演で詳しく検討する。本講演では、あくまでも創世記 1 章にこだわることにしよう。

我々は今、現代人として生きている。古代中近東の文化圏に戻るわけにはいかない。ではどうすれば、神のメッセージを間違えずに受け止めることができるのか。それは、難しくない。創世記 1 章に対峙するとき、現代的な意識のすべてを横に置いたらよいのである。ビッグバン理論も、進化論も、地動説も、地球が丸いという認識さえも、社会問題や人間の問題も、キリスト教界や神学の歴史さえも、すべてをちょっと横に置くのである。

ごく自然な、いつの時代の人々にも共通する、単純素朴な日常生活に戻ればよい。自然の中に身を置き、山を眺め、海を思い、木々や草花、動物の世界に思いを馳せたらよい。月を眺め、星空を楽しむ、そんな生活こそ、アブラハムやモーセ、ダビデやイザヤ、イエスやパウロと、我々との「共通世界」なのだ。古今東西を問わず、人類に共通の「生活の座」というものがある。それは、人間にとっては最も素朴な、日常生活である。人はそこに戻るとき、どのような文化圏に生きていたとしても、時代的制限の最も少ない環境を手にする。そこに自分の身を置くと、聖書の世界に入り込む。すると、神のメッセージを聴くことができるのだ。

2. 第一日(創世記 1:3-5)

では、一日目の創造のわざを追いかけてよう。神のわざは、日を追うごとに詳しい記述となっていく。最初ほど簡潔明瞭な言葉で、奥深い中身が表されている、ということである。ゆっくり、一言一言味わっていただきたい。

神は仰せられた。「光があれば。」すると光があった。(3 節)

神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。(4 節)

神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。(5 節)

著者は、神の創造のわざを七つのポイントに分けて記述する。つまり、①神が語りかけたこと、②語られた言葉の中身、③語られた被造物の誕生、④被造物に対する神の是認、⑤神の区別のわざ、⑥神が名づけたこと、⑦一日の終わりを示す定型句、である。実に手の込んだ書き方である。この七つのすべてに言及しているのは、この一日目だけである。最初に完全なパターンを例示し、その後の日々については、適当に省く。このようにして大事な点を強調し、メリハリをつけた。まことに見事な表現手法である。ぜひそのへんも楽しんでいただきたい。

神は仰せられた(ウァヨームル)という表現は、「ヴァヴ・コンセキューティブ」という、物語を語るときのヘブル語独特の用法である。状況を説明するための「誰々が語った」という形式をとる(例えば、3 章 1 節では蛇がエバに、16 章 1-2 節ではサラがアブラハムに語っている)。著者は、創世記 1 章において、この表現を 10 回使っている。一日目(3 節)、二日目(6 節)、四日目(14 節)、五日目(20 節)でそれぞれ一回ずつ、三日目は二回(9、11 節)、六日目は四回(24、26、28、29 節)で合計 10 回となる。七日目は、神が休まれたので、神の語りかけはない。10 という数字は、ひとめぐり、あるいは十分性を表わす。創造が神の意思のすべてを実現したことを示唆する。

なお、エジプトのメンフィス神学の碑文は、神「プタ」の言葉によって創造が始められたと伝えている。むろん、両者に依存関係はない。古代中近東の文化圏を共有している例として、知っておくとよい。

創造はすべて、神のことばによってなされた。この神の語りかけには、神の崇高な希望、希望を現実化する遠大な計画、計画を実行する強い意思、意思を 100 パーセント実現する力など、すべてが含まれる。神のことばによって創造が実現したことを理解できるのは、信仰による。「信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟る」(ヘブル 11:3)。創造は、信じることから切り離すと虚無の世界に陥る。神は人に信じるという特別な能力を与えられた。その信じるという力は、あらゆる分野に必要なものである。宗教の世界だけの話ではない。

神は**光があれ**、と命じた。この**光(オール)**とは何を意味しているのか。続く 4 節は「神は光とやみとを区別された」と述べている。従って、2 節の「やみ」(茫漠とした地の状況)に対比される「光」である。次の 5 節は「神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた」と述べている。「昼」と名づけられるような「光」は、太陽の光のように見える。しかし、太陽の光は四日目に登場する。従って、太陽の光ではあり得ない。

この**光**は、「茫漠とした地の状況」に差し込み、明るく光輝く世界をもたらした。2 節の「やみ」の状態では、人は生存できない。まずは、人間が活動できる「昼と言われる状態」が必要である。そこは、適度な明るさがあり、秩序があり、暖かさ、エネルギーがなければならない。ここで造られた**光**は、明るい**昼**を造り出した。その結果、それまで存在していた**やみ**は、**夜**となった。むろんこれは、地球の自転によって太陽の光がもたらす「昼と夜」とは違う。この一日目の段階では、未だ、「昼間の明るいところ」と「夜の暗いところ」が生じた、というイメージである。

従って、神が**光とやみを名づけられた**とは、時間が導入されたことだ、と解する学者も多い。エジプトでは太陽神「レ」が毎朝昇ることによって時間をつくっている、と考えられていた。バビロニアでは、神「マルドゥク」が時間の制定者と見なされていた。このような古代中近東の文化圏をイスラエルの民も共有していたとすれば、イスラエルの神こそ時間の創造者であると宣言したのかもしれない。

古代中近東の文献では、光とかやみという言葉は、霊の世界や道徳的な「善悪」を含むことが多い。しかし、この創世記 1 章の記述は、そのような雰囲気はいささかも感じさせない。むしろ、この**光**には、神の働き、神の輝き、神の恵み、神の栄光、神の臨在など、神が与える祝福を放散している。詩篇 104 篇の冒頭を読んでみよう。

わが神、主よ。あなたはまことに偉大な方。あなたは尊厳と威光を身にまといおられます。

あなたは光を衣のように着、天を、幕のように広げておられます。(詩篇 104:1-2)

詩篇 104 篇は、世界の創造を歌った詩である。その成立過程における両者の依存関係は認められない。にもかかわらず、両者は驚くほど類似している。この冒頭においても、それは明らかである。2 節の「天を、幕のように広げて」とは、創世記 1 章でいえば、二日目の「天、あるいは空の創造」にあたる。すると、その前の「あなたは光を衣のように着」という句は、一日目の「光」と関係がありそうである。両者に依存関係がなかったとすれば、この類似性は、古代中近東世界における共通の思考方法がもたらしたもの、と考えねばならない。

創世記 1 章 3 節の**光**は、詩篇 104 篇 2 節の「神が衣のように着ている光」に対応している。これは、とても重要である。神的な光であって、物理的な光ではない、という点である。詩篇 104 篇においても、太陽と月の登場は 19 節まで待たねばならない。物理的な光ではなく、神的な光について述べている箇所は、旧新約聖書を問わず、数多くある。例えば、預言者イザヤは、次のように述べている。

国々はあなたの光のうちに歩み、王たちはあなたの輝きに照らされて歩む。(イザヤ 60:3)

太陽がもうあなたの昼の光とはならず、月の輝きもあなたを照らさず、主があなたの永遠の光となり、あなたの神があなたの光栄となる。あなたの太陽はもう沈まず、あなたの月はかげることがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。(イザヤ 60:19-20)

同じような光についての言及は、新約聖書にも見られる。神は「近づくこともできない光の中に住まれ」る方(Ⅰテモテ 6:15-16)、「光を造られた父」(ヤコブ 1:17)、「あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方」(Ⅰペテロ 2:9)、「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない」(Ⅰヨハネ 1:5)、「神が光の中におられる」(Ⅰヨハネ 1:7)。「やみが消え去り、まことの光がすでに輝いている」(Ⅰヨハネ 2:8)。そして黙示録は、新しい天と新しい地では「もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない」(22:5)と述べている。イザヤが述べていることと、全く同じである。

むしろ、創世記 1 章 3 節の**光**は、前節の「やみ」に対比される。すると、物理的な光という側面を含んでいる。それは、太陽などと関係する光ではなく、神の衣のような存在としての「光」である。それは、人間が生存し、活動するのに不可欠な、バックボーンとなる光である。その光無くして、人間は存在し得ない。ただし、そのような光について、これ以上述べることはできない。神は昔、「光の住む所に至る道はどこか。やみのあるその場所はどこか。あなたはわたしをその国まで連れて行くというのか。また、その家に至る通り道を見分けるというのか」(ヨブ記 38:19-20)と、ヨブに語られた。我々もまた、この神の語りかけを聞く以外にない。

神が、**光があれば**と語られると、そのことばどおり、**光があった**。創造された物が繰り返えされるのはここだけである。他の五日間においても、神の命令どおり、ことは運んだ。しかしいずれの日も、「するとそのようになった」と簡潔に記されるのみである(7、9、11、15、24、30 節)。最初だけは詳しく描写し、その後は定型句で済ませるというのは、著者の巧みな表現技法である。しかしそれだけだろうか。ここで、**光があった**と少々違う言い回しをしたのは、この**光**が単なる物理的なものではなく、神的な特別の光だったことを暗示しているのではないだろうか。

著者は、**神は光を見てよしとされた**と、神が被造物を是認されたことを伝える。神は一日一日、その日の創造物を確認している。ところで、**光を見て**と、「見て」という言葉を加えたのは、この一日目だけである。続く日々も、神は見てから「よしとされた」ことは間違いない。見ないで是認することなど、あり得ない。にもかかわらず、最初の日だけは「見て」と加えた。一日目だけの特別丁寧な記述、これもまた、著者独特の表現技法である。と同時に、特殊な神の**光**であったことと関係しているのではないだろうか。

よしとされたは、神が是認されたということである。**よし(トープ)**とは、「良い」とか「美しい」とか「立派である」ことを表わす、最もポピュラーな言葉である。神は、命じたものが意図どおりにできあがっているかを確認し、満足感を表明された。この言葉も、1 章全体で 7 回出てくる(他に 10、12、18、21、25、31 節)。この 7 という数は、神の是認が完全であったことを暗示する。こうして、人間の生存のために必要な環境は、一つ一つチェックされながら整えられていった。

神は光とやみとを区別されたとは、光の創造により、2 節の「やみ」状態に別世界が生じたことを述べている。多くの学者が、光を昼間、やみを夜と結びつけ、この言葉を一日のサイクルが生じた、と解釈する。一日目の光とやみを、四日目の太陽と月の役割に合体させるなら、そういうことになる。事実神は、四日目にはそのことをなさっている(14、16 節)。しかし、この段階は、未だ一日目である。著者は、そこまで述べてはいない。やがて 18 節において再び、「神は光とやみを区別された」と同じ言葉が繰り返される。その時以降であれば、そのように理解するのは当然である。だが、ここではもう少し別の考え方をした方がよい。

区別する(ヤブデイル)という言葉は、この創造記事全体において、重要な役目を果たしている。6 節では「水と水」が、7 節では「大空の下にある水と大空の上にある水」が、14 節では「昼と夜」が、18 節では「光とやみ」が区別されている。一般に、創造とは新しい物質を生じさせる働きだと思われている。しかし、創造とは、それだけではな

い。既に存在するものに新しい機能を加え、新しいものに仕上げることも、立派な創造である。この創世記 1 章の創造は、基本的には、この意味における創造である。しかもその機能は、人間の生存に必要なものである。

神は、光とやみを区別した後、**光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた**。人間にとっては、区別することと名づけることは、ほとんど同じである。区別せずして、名づけることはできないし、名づけることなくしては、区別したことになる。ところが、旧約聖書や古代中近東の文献では、この両者は異なる。「区別する」は、「創造する」とほとんど同義だった。しかし、「名づける」とは、名づけた者が名づけられたものを支配する権限をもつことを意味した(創世 2:20、Ⅱ列王 23:34、24:17 など参照)。従って、**光を昼と名づけ**とは、神が昼を支配下に置いた、ということだった。**やみを夜と名づけられた**とは、同じように神が夜を支配下に置いた、ということである。

古代中近東の世界では、一般に「やみ」とか「夜」は神に反逆する存在と見なされていた。しかし、この一日目の**やみ**は異なる。光の創造の結果生じたものであり、神に反逆するものではない。神が**やみを夜と名づけ**、神の支配下にあると宣言したことは、古代中近東に生きた神の民にとっては、とても重要なメッセージを含んでいた。神は、同じことを、預言者イザヤをとおして語られた。

「わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを造る者」(イザヤ 45:7)

本節には、「名づける」という動詞が 2 回出てくる。この語はさらに、8 節に 1 回、10 節に 2 回、通算 5 回出てくる。加えて、22 節と 28 節には、「祝福する」という言葉が 1 度ずつ出てくる。この両方を合わせると、7 回出てくることになる。実は、「名づける」と「祝福する」とは、両方とも「支配下に置く」という基本的概念でくられる。それゆえ創世記 1 章の著者は、二つで 7 になるように記述した。これも、著者特有の表現技法である。さらに、本節には、「名づける＝光、やみ＝名づける」という逆順法(キアスムス)が見られる。著者はさまざまな表現技法を用い、偉大な創造の奥義を神の民に解き明かしていく。

夕があり、朝があった、これは、「一日の区切り」を表わす定型句である。**夕**とか**朝**という一日の区切りは、普通太陽がないと起こらない。その太陽の出現は、四日目である。従って、「夕があり、朝があった」という表現は、文字どおりの意味に取らない方がよい。創世記 1 章の著者は、神の創造の御業を安息日神学に基づいて記した。すべての神の創造の働きを、六日間に振り分け、一日一日の区切りを「夕があり、朝があった」という言葉で表した。これもまた、著者特有の巧みな表現技法である。

第一日は、一日目の神の創造のわざが終わったことを告げている。同じ表現は、8 節(第二日)、13 節(第三日)、19 節(第四日)、23 節(第五日)、31 節(第六日)に出てくる。七日目については、「夕があり、朝があった」、および「第七日」という定型的な句は出てこない。これは、神の働きは六日間のわざだけで終わったのではなく、現在もなお、続いていることを示唆するのかもしれない。さらに、「一日目」だけが序数で記され、六日目と七日目には定冠詞がついている。これらの日が特別重要な日だったからである。

ここで、「安息日神学」について、簡単に説明しておこう。

神の民イスラエルは、前 1,300 年前後に、モーセを先頭に出エジプトの経験をした。神はその際、民が守るべき十の戒めをお与えになった(出エジプト 20:1-17)。その四戒は、「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。——あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も——」(8-10 節)というものであった。この戒めの根拠は、神が六日間でこの世界を創造されたことにあった。

それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。(出エジプト 20:11)

出エジプトを経験した神の民は、この「安息日神学」に基づく創造の記録を読んだ(あるいは聞いた)。彼らは、メソポタミアやエジプトの神々ではなく、聖書の神こそ、この世界を創造された神であると知った。そして、その神が契約を結び、ご自分の民として招いてくださったと、信じたのである。その時以降神の民は、いつの時代であっても、同じ信仰に立ち、神の恵みを経験してきたのである。

3. 第二日(創世記 1:6-8)

さて、いよいよ二日目の創造のわがが始まる。もう 20 年近く前のことになるが、ある学校で創世記の講義をしていた。クラスも終わりに近づいたとき、一人の生徒が、「一日目の夕方から二日目の朝方にかけての 8 時間ほど、神は何をしていたのか」と尋ねられたことがある。創世記 1 章の「一日」を文字通りに解釈してはいけなと講義した直後のことだったので、面食らった。どのような質問をしてもよいけれど、質問する前に、人の話はよく聞かなければならない。大抵の質問は、もし人の話をきちんと聞いているなら、しないで済むものである。というわけで、二日目の神の創造の話を、じっくり聞くことにしよう。

神は仰せられた。「大空が水の真っただ中にあれ。水と水との間に区別があれ。」神は大空を造り、大空の下の水と、大空の上の水とを区別された。(6 節)

そのようになった。神は大空を天と名づけられた。(7 節)

夕があり、朝があった。第二日。(8 節)

神は仰せられた、著者は、一日目同様、神の語りかけをもって、二日目の創造を始めたことを伝える。神は、人間の舞台設定という創造のわがを、神のことばによって着々と進めていく。神のことばは、神の計画、意思、力を表わしている。

二日目に語られた神のことばには、二つのことが含まれていた。その一つは、**大空が水の真っただ中にあれ**である。**大空(ラキーア)**は、「広がり」、「空間」、「天空」、「円天井」、「ドーム」、「天蓋」などの訳が可能である。著者は、大きな空間がどんどん広がっていき、地上から見た空ができ上っていくようすを描いている。**ラキーア**の動詞「ラカ」は、もともとは、金細工人が金の板を「打ち延ば」したり(出エジプト 39:3)、金を「かぶせる」(イザヤ 40:19)作業を指した。それが自然界に対する神のわがにも使われるようになった。天に対しては「張り延ばす」(ヨブ 37:18)、地に対しては「敷く」(詩篇 136:6)、「押し広げる」(イザヤ 42:5、44:24)などの訳語があてられている。ここではむしろ、天に広がる**大空**に適用されている。**水の真っただ中**とは、2 節の「大水」を指している。その大水の中に、**大空**が侵入してきた、そんなイメージである。

神が語られたもう一つのことは、**水と水との間に区別があれ**だった。これは、その前の**大空が水の真っただ中にあれ**という神の命令の結果生じた現象である。神が別の創造を行ったわけではない。この二つの文章は、ヘブル詩の平行法に基づいて記されている。創世記 1 章は、詩文体ではなく散文体で書かれている。それはそのとおりなのだが、ことはそう簡単ではない。ここでも、詩的な用語(大空もその一つ)や文学手法(平行法)が登場する。現代の文学は、ジャンルごとに文体を変える。ところが、口伝伝承の世界では、散文体と詩文体の区別は、それほどはっきりしていない。それゆえある学者は、創世記 1 章を「詩的散文体」と呼んでいる。

水と水との間とは、前文の「水の真っただ中」同様、2 節の「大水」のことである。**区別があれ**とは、「大空」が入ってきた結果、生じる現象を指している。この言葉については、既に 4 節で解説した。エジプトにも、空気の神「シュ」が、際限のない海(ヌン)を上下に分けた、という記録がある。むしろ、両者に依存関係はない。このような考え方は、共通の文化圏においては、ごくありふれた話だった。

一日目は、神が「光があれ」と命じると、すぐ「光があった」と、記されている。ところが、この二日目は、神の言葉が実現したと記される前に、神が語られた言葉が著者の言葉で言い直されている。つまり、**大空が水の真っただ中にあれ。水と水との間に区別があれ**という神の命令が、**神は大空を造り、大空の下の水と、大空の上の水とを区別された**と解説し直される。これも、ヘブル詩の平行法が応用された表現技法である。このような繰り返しによって、二日目の創造は、一日目の創造より詳細に展開されていくようすを読者に印象づける。著者は、日にちが進むにつれ、言葉数を増やしていく。五日目には少々減らす、六日目には一気に大幅に増やす。このように表現技法を巧みに駆使し、創造の壮大さを描写する。

神は大空を造りの造り(アーサー)は、1 節の「創造した(バーラー)」とは違う。旧約聖書では、「アーサー」はいろいろなものにまんべんなく 400 回ほど使われている。「バーラー」の方は 48 回で、主語は常に神である。両語の意味に違いはほとんどない。強いて言えば、「バーラー」の方が、特別重要な存在とか、新しい形態、あるいは特別感動を覚える場合などに使われる。本節では、**大空**は新しい空間ではあるが、新しい物質が創造されたわけではない。つまり素材の水そのものが変化したわけではなく、水が後ろに退いた、というイメージである。

大空の下の水と、大空の上の水とを区別されたの大空の下の水は、次の三日目の創造から明かなように、地球とその周囲を構成する物質を指す。それでは、分けられたもう一方の**大空の上の水**の方はどのようなになったのか。詩篇 104 篇は、創造賛歌と言われる詩篇である。この詩篇が、創世記 1 章に深い関わりがあることは既に述べた。1-2 節の「光」は、創世記 1 章の一日目の「光」と対応していた。続く 3 節では、「水の中にご自分の高殿の梁を置き、雲をご自分の車とし」と歌われている。そこで言及されている「水」とか「雲」は**大空の上の水**に関連している。つまり、二日目に大空の上に登って行った水は、雲になって雨として降ってくる水の詩的表現である。

古代中近東の人々にとって、雨は自分たちの生存に関わる、最も重要なものだった。従って、雨に関する記述は特別多い。カナンの神話には、バアルの宮殿の窓が開かれ、雲を通して雨が降ってくるという記述がある。その天にある海と雨を司どっているのは、バアル神とされていた。エジプトは「ナイルの賜物」と呼ばれていた。そのナイル川に水があふれるのは、空の雲が雨を降らすからである。その雨を降らす実権をもっているのはどの神なのか、エジプトに住む人々にとっては、それが大きな問題だった。バビロニアの世界では、マルドゥク神が、地上に洪水をもたらさないよう番兵に命じている。(エノマ・エリシュ 4.139-40)

イスラエルの民にとっても、生活環境は変わらなかった。雨が降らないことによって作物は実らず、飢饉に襲われる。それは、族長時代であっても、王国時代や預言者の時代であっても、いつの時代であっても、変わらなかった。雲を通して雨が降ってくることは、彼らにとっても常識だった(創世 9:14、士師 5:4、I 列王 18:45、イザヤ 5:6、ヨブ 26:8、詩篇 77:17、エレミヤ 10:13、51:16、など参照)。

神は、雨のためにその降り方を決め、いなびかりのために道を決められた。(ヨブ記 28:26)

だれが知恵をもって雨雲を数えることができるか。だれが天のかめを傾けることができるか。(ヨブ記 38:37)

主は地の果てから、雲を上らせ、雨のためにいなづまを造り、その倉から風を出される。(詩篇 135:7)

著者は、神の語りかけを説明した後、**そのようになった**と記述する。三日目も、神のことばどおり、ことは実現した。一日目では、「光があった」と、造られたものに言及されている。ところが、二日目以降は常に、**そのようになった**と述べるにとどめられている。このような単純明快なフレーズを繰り返すことによって、読者の関心を、被造物より神のことばそのものに集中させている。これも、著者特有の表現技法である。預言者イザヤは、神のことばの確かさを次のように証言している。

わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。(イザヤ 55:11)

神は大空を天と名づけられた。ここでは、上下に分けられた水については言及しない。ただ、**大空**についてのみ語っている。水に関しては、三日目に先送りされる。**天(シャマイム)**は、言葉としては 1 節に出てくる「天」と同じである。しかし、本節の**天**は、人間から見た「天」であり、1 節の「天と地」の「天」とは異なる。同じ言葉であっても、文脈によって内容は微妙に違う。その違いを察知することは、古代文書を読むときに不可欠である。

現代人は、物事を正確に把握するため、言葉を限りなく増やしていく。そうすることによって、学問は大きく発展できた。そういう学問を受けた我々は、古代人に戻ることはできない。同様に、古代人を現代人であるかのように期待してはいけない。古代人の語彙の乏しさは、生活体験の貧しさを意味しない。乏しい語彙ではあっても、古代の人々は我々以上の豊かな感性をもち、多くの生活体験をしていた。そのような状況を深く察知し、著者の言わんとするところを読み取っていくことが肝要である。

名づけられたとは、名づけたものを支配下に置いた、という意味である。**大空を天と名づけられた**とは、神が大空を支配していると言われたに等しい。ここで名づけられた**天**は、我々がごく日常的に見ている「空」を指している。1 節の「天と地」の**天**とは違う。古代中近東の人々は、空の上の方には「水の層」があり、人間が生きていくために必要な雨は、そこから降ってくると考えていた。雨の量は、彼らにとっては死活問題だった。多すぎても、少なすぎてもいけない。神が大空を名づけられたとは、大空を支配下に置いたということであり、雨の量を決める方である、ということだった。

二日目の創造の書き方は、他の日とは違っている。「よしとされた」という、神の是認の言葉がない。それは、二日目の創造はよくなかった、ということではない。神が**天と名づけられた**以上、それはあり得ない。それに、六日目の最後に、神はすべてをご覧になって「よしとされ」ている。従って、二日目不完全だったはずはない。二日目の創造は完結したのではなく、三日目に引き継がれたということである。二日目には、**大空**が造られた。三日目に

は陸地が造られる(10 節)。この二日間の創造がそろったとき初めて、神はチェックされた。三日目は、「よしとされた」が二度記されている。二日目の「よしとされた」は、三日目の二つの是認の中に含まれていた。

なお神は、六日目にも、創造が終わった時と、その後総点検された時の二回、「よしとされ」ている。著者は、イレギュラーな書き方を織り交ぜながら、全部で七つになるように工夫している。これも、創造の完全性をより深く印象づけるための、著者の優れた文学的センスである。まさに脱帽、というところである。

夕があり、朝があった。第二日。かくして二日目も終わる。日本語では分からないが、一日目と六日目と七日目の日にちには定冠詞がついている。二日目から五日目には、定冠詞がない。これもまた、日にちにメリハリをつけた、著者特有の表現技法である。

4. 第三日(創世記 1:9-13)

創造もいよいよ三日目、道半ばに差し掛かっている。この三日目は、一日目および二日目と違い、一つではなく二つの物が創造された。

神は仰せられた。「天の下の水が一所に集まれ。かわいた所が現われよ。」そのようになった。(9 節)

神はかわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを見て良しとされた。(10 節)

神は仰せられた。「地が植物、すなわち種を生じる草やその中に種がある実を結ぶ果樹を、種類にしたがつて、地の上に芽ばえさせよ。」そのようになった。(11 節)

地は植物、すなわち種を生じる草を、種類にしたがつて、またその中に種がある実を結ぶ木を、種類にしたがつて生じさせた。神はそれを見て良しとされた。(12 節)

夕があり、朝があった。第三日。(13 節)

まず、創世記 1 章の著者が、この創造記録を書いているスタンスを、再度確認することから始めよう。この視点をはっきり自覚して講演をお聞きいただかないと、「労多くして収穫ゼロ」ということになりかねないからである。

神はイスラエルの民に、神と被造物の関係を知り、神の民としての使命を全うしてもらいたいと願われた。そこで神は、一人の人物を立て、創造の出来事を啓示された。立てられたその人は、自分が観察している世界を、古代中近東の世界に生きる者としての限界をもちながら、神の創造の出来事として記述した。彼は、神が六日間ですべてを造られ、七日目に休まれたという啓示(出エジプト 20:11、31:17、レビ 19:22、26:2)に基づき、創造の記録をまとめた。同時代に生きる神の民イスラエルが信仰に立ち、与えられた使命を全うすることができるようにとひたすら願い、あらん限りの表現技法を用いて。

この三日目もまた、**神は仰せられた**という言葉で始まる。

神は、**天の下の水が一所に集まれ**と命じる。二日目の創造において、水は既に大空によって上下に分けられていた。この三日目は、大空の下の水が一か所に集められる。神は既に大空を天と名づけられていた。それゆえ、ここでは「大空の下の水」ではなく、**天の下の水**と変えられている。この水から、陸と海、つまり人の住む世界が造られた。神が水に**一所に集まれ**と命じると、**かわいた所が現われた**。この表現は、**かわいた所**は創造されたのではなく、水が引いて水底の土地が現われた、と述べているように見える。しかし、2 節では水は茫漠とした存在であり、6-7 節ではその水は大空によって分けられただけである。すると、科学的な思考に慣れた人は、その水はいつ土に変えられたのかと疑問を抱く。しかし著者は、そのような生成過程には関心を示していない。ただ、陸や海が誕生した、と淡々と伝える。詩篇 104 篇の詩人は、この点について、少々異なった書き方をしている。

また地をその基の上に据えられました。地はそれゆえ、とこしえにゆるぎません。

あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。水は、山々の上にとどまっていました。

水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の声で急ぎ去りました。(詩篇 104:5-7)

ここで詩人は、「地をその基の上に据えられました」(5 節)と、地の基が据えられたことを述べる。そして次に、「深い水を衣のようにして、地をおおわれました」(6 節)と、その地の基を水が覆ったことを説明する。そして最後に 7 節で、「水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の声で急ぎ去りました」と、水が引いたことを加える。この 7 節の記述こそ、創世記 1 章 9 節の**天の下の水が一所に集まれ。かわいた所が現われよ**という命令に通じる。詩篇 24 篇もまた、同じことを明らかにしている。

地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである。

まことに主は、海に地の基を据え、また、もろもろの川の上に、それを築き上げられた。(詩篇 24:1-2)

地球上の陸地がどのように形成されたのか、創世記 1 章の著者は、この問題については何も述べていない。著者は、地球上には陸地と海とがあることをよく知っており、そのことを三日目の創造として描写するだけだった。

一つ目の陸と海の創造については、神の命令どおり**そのようになった**。神の意思は必ず実現する、著者はこのことを繰り返し伝える。創造のわざを信じるとは、結局神のことばの權威を受け入れることに他ならない。

神はかわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。ここでの**地と海**は対立概念である。今日でいえば陸と海のことである。**海**は複数形で表現されている。この複数形は、二日目に分けられた「上の水」と「下の水」のことではない。古代中近東の世界では、多くの海が存在したと考えられていた。この箇所は、そのことを反映したものと思われる。あるいは著者は、海が陸地によって幾つかに分けられたと考えていたのかもしれない。その場合、地が単数形なのは、自分たちが住む場所を中心に考えた結果であろう。

地と名づけ、…海と名づけられたという表現は、神が地と海の両方を支配下に置いた、と宣言したことを意味する。荒れる海の恐怖を絶えず経験していた古代の人々にとって、両者の境界線問題は深刻だった。預言者エレミヤは、この点に関し、次のように述べている。

あなたがたは、わたしを恐れないのか。——主の御告げ——それとも、わたしの前でおののかないのか。わたしは砂を、海の境とした。越えられない永遠の境界として。波が逆巻いても勝てず、鳴りとどろいても越えられない。(エレミヤ 5:22)

海から陸地を分けるという作業は、遂に完成した。**神はそれを見て良しとされた**。しかし、ここはまだ、三日目の創造の途中である。この段階で神の是認の言葉が入っているのは、古代中近東の人々にとって、海は大きな災いをもたらすものだったからであろう。神の民イスラエルは、神ご自身が海の支配者であることを繰り返し歌っている(詩篇 65:7、89:9、93:3-4、107:25、29)。

三日目の創造は、陸地と海の形成で終わらなかった。さらにもう一つの創造のわざが行われた。それは、陸地から植物が育つようにという、創造である。そのために、再び**神は仰せられた**。これは、三日目では二番目、初めから数えると四番目の神の語りかけである。

今回の語りかけは、かなり長い。それは、**地が植物、すなわち種を生じる草やその中に種がある実を結ぶ果樹を、種類にしたがって、地の上に芽ばえさせよ**というものだった。ここでは、神が地をとおして草木を生じさせることを述べている。地が草木を生じさせることについては、古代中近東の文献にも出てくる。エリドゥ伝承のテキストは、新しい水の神「エンキ」がすべての水を集め、植物を生じさせていくことを伝えている。

29 節を見ていただきたい。そこでは、神が「見よ。わたしは、全地の上にあって、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる」と語っている。つまり、本節の**種を生じる草(アシャブ)**と**種がある実を結ぶ果樹(エイツ)**は、人間の食物として与えられたことが分かる。29 節の人間の食物には、本節の**植物(ダシャー)**が出てこない。その理由は、**ダシャー**が**アシャブ**と**エイツ**の総称だったからである。この二つには、**種がある**。古代中近東の人々は、「種」の中にその植物の生命が宿っていることをよく理解していた。従って、この箇所においても、**種のある草や種のある樹木は、種類にしたがって(ミーン)**成長する、と記述されている。

この**種類にしたがって**は、植物であれ、動物であれ(21、24-25 節参照)、生命は神の秩序のもとに継承されていくことを明らかにしている。この言葉を基に、進化論への反駁を試みる人たちがいる。進化を肯定するにしても、否定するにしても、このような日常言語から議論するのは、やめた方がよい。著者は単に、ブドウの木からはブドウの実がなり、オリーブの木にはオリーブが実る、ただ、そういうことを言っているだけである。古代中近東に生きた人々が食物として知っていた**草や実を結ぶ果樹**は、ごくわずかな種類に過ぎなかった。

神が命じられたことは、**そのようになった**。この言葉を読むと、読者は、三日目の創造記述は終わった、そう勘違いすると思う。ところが著者は、ここで終わらせてはいない。神が命じられた言葉を、ほぼそのまま繰り返し、記述を続ける。

地は植物、すなわち種を生じる草を、種類にしたがって、またその中に種がある実を結ぶ木を、種類にしたがって生じさせた。先の神が語られた言葉との違いは、一つだけである。「種類にしたがって」という句が一つだけだったのが、ここでは二つに増えたことである。著者はなぜ、**種類にしたがって**という言葉の繰り返したのか。食物となる草や木は、神の定めた法則に基づいて生命が継承されていくという事実を強調したかったからである。それはまた、これらの植物が、人間の食物として極めて重要だったことを示唆している。

この著者の追加文をもって、三日目の創造は終わった。**神はそれを見て良しとされた。**この神の是認の言葉は、既に見たように、二日目にはなかった。従って、この言葉は三日目に二度繰り返され、二日目の分までカバーした。著者の卓越した表現技法の見事さは、誰もが舌を巻くほどである。

夕があり、朝があった。第三日。これは定型的な言い回し。

創世記の著者は、神の啓示に基づき、聖霊の助けをいただきながら、神の創造のわざを記録している。これまでに、六日間の創造の内、前半の三日間を終えた。神はこれまで、光を備え、大空を造って天候を整え、海と陸とを分けて食物が供給できる環境を整えた。

古代中近東の文献、特に、パピルスの Insinger は、水、地、種の重要性を説いている。エジプトに住む民にとっては、ナイル川の恩恵に浴した肥沃な土地を耕し、そこに種を蒔いて収穫することが、生きることそのものだった。雨、土地、食物のサイクルがあって初めて、彼らは生きることができた。これら三つは、いつの時代であっても、人間存在には不可欠なものである。古代中近東の人々にとっては、この三つを安定的に享受できることが神の祝福を受けることだった。

神の民イスラエルにおいても、状況はさほど変わらない。神は、洪水による裁きの後、ノアに次のように約束された。「地の続くかぎり、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜とは、やむことはない」、と。この創世記 8 章 22 節には、洪水後の世界が、食物（種蒔きと刈り入れ）、天候（寒さと暑さ、夏と冬）、時間（昼と夜）の順番で再び整えられたことが述べられている。この順番は、1 章の創造記事の「昼と夜（一日目）、天候（二日目）、食物（三日目）」という順番とは逆になっている。ここにも逆順法の文学技法が見られる。

5. 第四日（創世記 1:14-19）

いよいよ四日目である。四日目の創造は、太陽、月、それに星などの天体である。既に、一日目には昼と夜、二日目には大空、そして三日目には地球が造られた。人間の生存に必要な、活動の場（時）、雨などの天候、食料などは整えられた。今度は目を天に向ける。この地球から、昼間や夜を司っている天体へと。

神は仰せられた。「光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ。」（14 節）

また天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」そのようになった。（15 節）

神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。（16 節）

神はそれらを天の大空に置き、地上を照らさせ、（17 節）

また昼と夜とをつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神はそれを見て良しとされた。（18 節）

夕があり、朝があった。第四日。（19 節）

この創造の記録では、六日目の創造に一番多くのページが割かれている。創造のゴールが人間にあったからである。その次に多くの言葉が費やされているのは、四日目である。自然の中で、遊牧や農耕に生きていた古代中近東の人々にとっては、天体が人間生活に及ぼす影響は絶対的なものだった。それは、人工物に囲まれて生活している現代人にとっては、想像しがたいものである。

エジプトでも、太陽や月は神として拝まれ、星も人間の歩みを支配するものと考えられていた。エジプトの神「アムン-レ」への賛歌には、太陽神が時を刻んでいることを述べている。また、シュメールの天文学の文書は、主要な神々であるアン、エンリル、エンキが太陽、月、星をそれぞれの場所に置いたと述べている。バビロニアの太陽神シャマシュへの賛歌には、季節やカレンダーを決めるのに重要な役割を果たしていることが歌われている。

出エジプトを経験し、カナンの地を目指した神の民イスラエルは、同じような宗教的・文化的環境を背負いなが

ら生きていた。それゆえ著者は、太陽は地上に光を届けて収穫をもたらすこと、月や星は夜の休みを備える存在に過ぎないことを説き明かした。神は、人間にとって不可欠なものをすべてを備えられた。本当に恐れ、礼拝すべき方は、メソポタミアやエジプトの神々ではない。万物を支配下に置いている「世界の造り主、唯一の神」である。

この四日目の創造の記録は、繰り返しが多く、すっきりしない。そう感じる学者の多くは、その背後に資料があったと推測する。だが、それは見当違いの解決法である。逆順法という文学手法を考慮すれば、資料を想定してじっくり回すより、ずっとすっきりする。もし逆順法に基づいて書き直すと、以下のようになる。

- A 光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ
- B しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ
- C 天の大空で光る物となり、地上を照らせ
- D 大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ
- D' 小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた
- C' 星を造られ・・・天の大空に置き、地上を照らさせ
- B' また昼と夜とをつかさどり
- A' 光とやみとを区別するようにされた

この逆順法という文学手法は、古代中近東の文献ではよく知られていた。聖書においても、創世記にとどまらず、他の旧約各書、新約聖書の福音書などに数多くみられる。このような考え方の流れは、特別な文学手法というより、人が潜在的にもっている能力の一つだと見なす人もいる。つまり、物事を表現しようとすると、無意識のうちに出てくるものなのかもしれない。しかし、かなり頻繁に出てくるし、ときに複雑な構造をたどることができるので、意図的な手法と見なす方がよい。聖書批評学は、重複する表現に出くわすと、すぐ資料の違いを想定する。しかし、資料分析に走るより、文学手法の解明に向かう方が、はるかに有効な場合が多い。

四日目の創造もまた、**神は仰せられた**という言葉で始まる。この神の語りかけは、初めから数えると五番目になる。著者がこの言葉を繰り返し記述するのは、この世界が隔々に至るまで、神の主導的な意思によって統括されていることを強調するためである。

四日目の神の命令は、**光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ**だった。**光る物**とは、16 節から太陽と月と星を指す。四日目に太陽や月、そして星が造られたとは、到底考えられない。このような天体が造られる前に、地球が誕生していたこともあり得ない。太陽と地球の自転なくして、昼と夜が生じることもない。第一、太陽無しで、どのようにして最初の三日間が分かるのか。現代人であれば、誰でもそんな疑問をもつ。ただ、我々にとってこんな当たり前のことも、よく分かるようになったのは、たかだか数百年前のことである。

3,000 年以上もの昔、古代中近東地方に住む人々は、現代人がもつこのような疑問を抱くことは全くなかった。彼らは、太陽や月、星などがいつ、どのように造られたのかということなど、興味をもっていなかった。彼らの関心は、自然界を支配している神々を怒らせてはいけない。自分の身に不幸を招かないよう、天体の異常な動きに神経を使うことだった。

創世記 1 章は、そのような人々に向かって書かれたものである。だから著者は、天体や天体を支配している神々を恐れるな、人間のために完全な配慮をもって天体を創造した唯一の神に服せ、と説いたのである。太陽などの天体が四日目に創造された、と言いたかったのではない。そういう問題意識そのものが、著者にも、最初の読者にもなかったのである。

では、著者は、どんな思いでこの記録を書いているのか。たぶん、身の回りで大事だと思ったことから書き始めたに違いない。目ざめと共に始まる昼間の活動、日が沈んで味わう一夜の憩い、そんな時の流れをまず書こう（以上が一日目）。続いて、雨や日照りの太陽の恵みに（二日目）。それから、食卓に並べられた食物への感謝にふれる（三日目）。これが誰でも大事にしている素朴な日常生活であろう。その一つ一つは、神の御意思によって人間のために備えられた。まずこの三つのものをもたらす「背後にあるもの（光、大空、陸地）の創造」を描こう。続く四日目には、目を天に向け、人間に必要なものを天で供給する源（太陽、月、星）の創造を記すことにしよう。

私は、こんな想像をしてみた。あまりいい説明ではないかもしれない。たぶんあなたなら、もっとすばらしい考えを思い浮かべてくださるだろう。とにかく、著者の心の中にあった思いを推し量ってもらいたいのだ。神は著者が抱いたすべてのことをとおして、神の御心を啓示されたからである。

著者は、**光る物が天の大空にあって**と述べるが、「太陽（シャメシュ）」とか、「月（ヤルアッハ）」という言葉を持ち出

さない。古代中近東の文化圏に生きた読者たちに、天体と太陽神「シャマッシュ」や月神「ヤリ」とを結びつけさせないためである。天体は神々ではない。ただ、地球に光を届けるだけの存在に過ぎない。それゆえ著者は、このような天体に向かって、**地上を照らせ**という神の命令を二度繰り返す。太陽は、人間が仕えるものではない。太陽が人間に仕えるのだ。著者は、このメッセージを伝えるため、この創造を記録しているのである。

これらの天体は、**しるしのため、季節のため、日のため、年のため**に存在した。新改訳では、しるし、季節、日、年の四つを並列的に訳している。むろん、このような理解も可能である。しかし、①季節と②日と年、この二つが「しるし」を形容していると解釈する方が、自然である。天体は、「季節のしるし」のためにあり、さらに「日と年のしるし」のためにある、と読むのである。

天体が「季節のしるし」のためにあるとはどういうことか。日本人は、季節といえばすぐ四季を想像する。しかし、農業を営み、牧畜に生きた古代中近東の人々にとっては、**季節**とは、種まきや収穫の季節を指していた。一日目は人が活動する昼間が、二日目は雨などをもたらす大空が、三日目には食物になる草や木の実が備えられた。そしてこの四日目になると、天体が種まきや収穫の季節を備えた、と言いたかったのである。この**季節**という言葉は、レビ記では「例祭」と訳されている(23:2、4、37、44)。季節とは、季節ごとに祝われる祭りと深く結びついていた。人々は、祭りを祝い合って、季節の喜びを共有していたのである。

天体は「季節のしるし」だけでなく、「日と年のしるし」でもあった。**日のため**とは、天体が一日、一日と時を刻んでいることを述べている。人々は、洋の東西を問わず、昔も今も一日を最小単位に生活している。朝起きて仕事に出かけ、夕方戻って休息を取る。その一日の間に、家族や近隣社会、職場で、さまざまな喜怒哀楽を経験する。**年のため**とは、天体が一年という時を刻んでいくことを指している。一年は人間の生涯を刻んでいく単位で、年齢は世界共通のものである。その一年の間には、季節ごとに何回かの祭りが祝われる。その祭りは、共同体の中で生きている喜びを分かち合う時だった。古代中近東の世界では、天体は時に、人間の日常生活を左右する恐るべきものであり、不吉な予感を生み出させるものだった。しかし聖書は、天体は人の日常生活に必要な恵みをもたらすものと説いている。

主は季節のために月を造られました。太陽はその沈む所を知っています。

あなたがやみを定められると、夜になります。夜には、あらゆる森の獣が動きます。

若い獅子はおのれのえじきのためにほえたけり、神におのれの食物を求めます。

日が上ると、彼らは退いて、自分のねぐらに横になります。

人はおのれの仕事に出て行き、夕暮れまでその働きにつきます。(詩篇 104:19-23)

では、16 節に進もう。**神は二つの大きな光る物を造られた**。この箇所**の二つの大きな光る物**とは、太陽と月のことである。**造られた(アーサー)**は、これらの天体が四日目に新たに造られたというより、三日目に造られた地球との関係を整備した、という意味である。これから造る動物や人間が地球に生存可能となるために、天体が最も適した状態に整えられた、ということである。

大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。著者はここで、太陽のことを述べるのに、太陽という言葉を使わなかった。むしろ、**大きいほうの光る物**と、とても変わった言い方をしている。著者は、光る物(14 節)、天の大空で光る物(15 節)、**大きい方の光る物**(16 節)と、表現を変えながら、3 度も「光る物」という言葉を繰り返す。だが、「太陽」とは一言も言わない。月についても同じである。光る物(14 節)、天の大空で光る物(15 節)、そして、**小さい方の光る物**(16 節)と表現しながら、「月」とは一言も言わない。

これは、古代中近東の宗教的背景と関係がある。エジプトでは、太陽は神「レ」と呼ばれ、神々の中でも最高位を占めていた。メソポタミアでは、月は神「シン」と呼ばれ、主神の神の一人だった。それぞれの国家では、神々の名前を言い表さないだけでも、不敬罪によって処罰された。このような環境やメンタリティーをよく知っていた著者は、この天体の創造を記述するにあたり、意図的に神の名前を書かなかった。エジプトを脱出してカナンを目標している神の民に、太陽神や月神の本質をよく分からせる必要があったのである。

太陽は、常に変わず光と暖かさを届けてくれる。それは、昼間を支配している光である。夜支配するのは月である。月は星に比べ、圧倒的に大きく見える。従って、夜を支配するものと言われている。このことは、創世記 1 章の著者は、目に見えるままを描写していることが分かる。

昼をつかさどらせ…夜をつかさどらせた。太陽や月は、それぞれ分担すべき領域をもっている。それは、場所的なものというより、時間的なものだった。むろん、太陽が昼で、月が夜である。**つかさどる(レムムシェルト)**の原

義は、「支配する」である。ここでは、太陽が、昼間地球を照らし、多くの恵みを注いでいることを述べている。聖書によれば、本当の支配者は神である。神が太陽に、人に祝福を注ぐ大きな役割を与えた。月もまた、人々に静かな安らぎの夜を備えた。そのような状況を、「つかさどる」と表現したのである。これは、古代中近東の宗教とは全く違う天体理解だった。

また星を造られたという表現は、最後に何となく付け足したような書き方である。我々は、星は恒星で、太陽と本質的には変わらないことを知っている。しかし、古代中近東の人々の考えは違っていた。メソポタミア地方の宗教では、無数に輝く星の一つ一つは神々の増殖したもので、人間の生活を左右するもの、と見なされていた。例えば、バビロニアのエヌマ・エリシュの叙事詩は、星を最初に、続いて月、そして最後に太陽を置いている。彼らにとって、星は太陽や月以上に重要な存在で、人々の生活や運命を支配する不気味な存在だった。従って占星術は、紀元前 4,000 年頃から盛んになっていた。

こういう宗教的事情によく通じていた著者は、太陽と月の後、そつと**神は星を造られた**と付け加えた。つまり、先の文献とは逆に、太陽を最初、月を二番目、そして最後に星を述べた。しかも、これらの天体すべてを統括しているのは、唯一の神であると宣言したのである。古代中近東の人々にとっては、これほど痛烈なメッセージはなかった。神の直接的・絶対的な支配について、ヨブは友人のビルダテに次のように述べている。

神が地をその基から震わすと、その柱は揺れ動く。

神が太陽に命じると、それは上らない。星もまた封じ込められる。

神はただひとりで天を張り延ばし、海の大波を踏まれる。

神は牡牛座、オリオン座、すばる座、それに、南の天の室を造られた。

神は大いなることを行なつて測り知れず、その奇しいみわざは数えきれない。(ヨブ記 9:6-10)

そのヨブに向かい、神は、その終わりにおいて、次のように語りかける。

あなたはすばる座の鎖を結びつけることができるか。オリオン座の綱を解くことができるか。

あなたは十二宮をその時々にしたがって引き出すことができるか。

牡牛座をその子の星とともに導くことができるか。

あなたは天の法令を知っているか。地にその法則を立てることができるか。(ヨブ記 38:31-33)

神はそれを見て良しとされた。神は四日目に造られた天体をご覧になり、神の是認を告知した。

ところで、この言葉の後の書き方は、他の日の書き方と違っている。これまでの一日目から三日目までは、神は「名づける」という作業をしている(5、8、10 節)。五日目と六日目には、祝福の言葉が続く(22、28 節)。それに比べ、この四日目だけは、何も続かない。いきなり、**夕があり、朝があった。第四日**と、一日の締めくくりの言葉が続く。なぜか。

このような書き方に特別意味はない、そう考える学者もいる。しかし、他の日では何らかの言葉が続くにもかかわらず、この四日目だけは何もない。私には、引っかかる。古代中近東の人々は、太陽、月、星を、神性を帯びたもの、神々と見なしていた。そういうものに神が名前をつけたり、祝福することは、彼らに誤解を与えただろう。それゆえ、あえて何も付け加えず、四日目を終えたのではないだろうか。

6. 第五日(創世記 1:20-23)

創造の御業も、終盤に近づく。いよいよ五日目である。この日の神の創造のわざは、海の生き物と空の鳥だった。四日目の天体の創造は、一日目に対応していた。この五日目の創造は、大空と海が造られた二日目に対応している。

神は仰せられた。「水には生き物が群がれ。鳥が地の上、天の大空を飛べ。」(20 節)

神は、海の巨獣と、種類にしたがって、水に群がりうごめくすべての生き物と、種類にしたがって、翼のあるすべての鳥を創造された。神はそれを見て良しとされた。(21 節)

神はそれらを祝福して仰せられた。「生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は地にふえよ。」(22 節)

夕があり、朝があった。第五日。(23 節)

この五日目の創造もまた、神の語りかけから始まった。**神は仰せられた**、これは初めから数えると、六番目の神の語りかけである。この世界や人間の創造は、自然や偶然によって出来たわけではない。それは、「世界の基の置かれる前から」(エペソ 1:4)、「神があらかじめお立てになったみむねによることであり」(エペソ 1:9)、「みこころ

によりご計画のままをみな行方うの目的に従って」(エペソ 1:11)なされた。それが、**神は仰せられた**という神の語りかけの背景にあったことである。

水には生き物が群がれ。鳥が地の上、天の大空を飛べ。著者はこれまで、逆順法(キアスムス)や言葉遊び(メリスムス)、平行法(パラレリズム)などの文学手法を用いて、創造の記録を描写してきた。この五日目においても、海の魚と空の鳥の創造を、三重の平行法を用いて記述している。**水には生き物**(20 節)、**水に群がりうごめくすべての生き物**(21 節)、**海の水に満ちよ**(22 節)が一方の平行句群であり、**鳥が地の上**(20 節)、**翼のあるすべての鳥**(21 節)、**鳥は地にふえよ**(22 節)が他方の平行句群である。この箇所には、このような三重の平行法により、空と海にたくさんの生き物が満ち溢れていくようすが、見事に描かれている。神は、空いっぱい鳥が、海いっぱいに魚が満ち、増え広がっていくことを望まれた。それは、美しい、楽しい、活気に満ちた自然の世界だった。一羽の鳥もない空を想像してみるとよい。一匹の魚も泳いでいない川や海なども。本当に寂しい限りではないか。詩篇 104 篇の作者も、こんな風に歌っている(24-25 節)。

主よ。あなたのみわざはなんと多いことでしょう。

あなたは、それらをみな、知恵をもって造っておられます。

地はあなたの造られたもので満ちています。

そこには大きく、広く広がる海があり、その中で、はうものは数知れず、大小の生き物もいます。

ここで鳥に関しては、**鳥、翼のある鳥、鳥と**、ちょっとした違いはあるが、ほとんど同じ表現を用いている。それに対し海の生き物については、**海の巨獣と水に群がりうごめくすべての生き物**と、あたかも二種類の魚が造られたかのように記している。後者はごく普通の魚を指している。問題は、前者の**海の巨獣(タンニーン)**である。ウガリットの文献では、「タン」は「ヤム(海)」の別名で、「タンニーン」は、海に生存する「バール神に敵対する代表的なもの」だった。では、この箇所の**タンニーン**はどのような意味か。

「タンニーン」という言葉は、旧約聖書では二通りの意味がある。一つは、「蛇」(出エジプト 7:9、10、12、申命 32:33、詩篇 91:13、32:2)、「わに」(エゼキエル 29:3、32:2)、「竜」(エレミヤ 51:34)などと訳されている。これらは、ごく普通に生きている海の生き物である。それに対し、「海の巨獣」(詩篇 74:13)、「レビヤタン」(詩篇 74:14)、「蛇レビヤタン」(イザヤ 27:1)、「竜」(イザヤ 51:9)などは、やがての終末時に完全に滅ぼされると予告されている。それは、神に敵対する存在として描かれている(ヨブ 7:12 および詩篇 148:7 などでは「海の巨獣」と訳されているが、神に反逆するものではない)。

著者がこの箇所の**タンニーン**をどちらの意味で記述しているのかは、はっきりしない。しかし、わざわざ他の海の生き物と区別しているのだから、特別な存在と考えていたことは間違いない。むしろここでは、神に反逆しているようすは全く見られない。むしろ、唯一の神が**タンニーン**を海の一被造物として造られたことが、淡々と記述されている。最初の読者だった古代中近東の人々は、この記述を読んだだけで、**タンニーン**は神的な存在ではなく、被造物の一つに過ぎないことを悟ったはずである。

この五日目の**海の生き物**と空の**鳥**の創造に対し、**創造した(バーラー)**という言葉が使われている。この言葉は、1 節以来のことであり、次に使われるのは 26 節の人間に対してである。一般に「バーラー」は、重要な創造に言及するときに使われる、と考えられている。では、なぜこの箇所ですべて使われているのか。二つの可能性がある。一つは、空や海の生き物、自然界が人に大きな感動を与えるような創造だったから、というものである。もう一つは、**海の生き物の中にタンニーンが含まれているからだ**というものである。この二つは大きく違ってくるように見えるが、古代中近東の人々にとっては深く結びついていた。だから、どちらかの一つと、決める必要はない。

この箇所では、先の植物と同じように、**種類にしたがって(ミーン)**という表現が二度繰り返されている。**水に群がりうごめくすべての生き物**に対して一度、**翼のあるすべての鳥**に対してもう一度。くどいと言おうか、丁寧と言おうか……。おそらく、きよいものときよくないものを分類するときに、重要な意味をもっていたのであろう(創世 6:20、7:14、レビ 11:14-29、19:19、申命 14:13-18、22:9-11 など参照)。むしろ、**海の巨獣(タンニーン)**については、**種類にしたがって**という言葉から除外されている。

このような創造の後、**神はそれを見て良しとされた**。ところが、それだけでは終わらない。著者は、この創造記事においてこれまで使われたことのない初めての言葉を付け加えた。**神はそれらを祝福して仰せられた**、と。**祝福する(バラク)**という言葉は、前節の**創造した(バーラー)**との組み合わせで、言葉遊びが見られる。ここと同じ「バーラー」と「バラク」の言葉遊びは、人間の創造のときにも見られる(27-28 節)。このような言葉遊びの繰り返し

は、動物の創造も、人間の創造同様、神にとって大きな意味をもっていたことを示唆する、と考える学者もいる。そうかもしれない。そうではなく、人間の存在にとって、動物の創造は大きな意味があったので、神の祝福が告げられた、と理解する学者もいる。神にとってか、人にとってか、どちらか一つに限定しなければならない理由があるとも思えない。両方を含めて考えておこう。

天は喜び、地は、こおどりせよ。国々の中で言え。主は王である。

海とそれに満ちているものは鳴りとどろけ。野とそこにあるものはみな、勝ち誇れ。

そのとき、森の木々も、主の御前で、喜び歌おう。

確かに、主は地をさばくために来られる。(I 歴代 16:31-33)

いずれにしても、神が最初に祝福されたのは、人間ではなかった。空の鳥であり、海の魚だった。現代のキリスト者が考えなければならない事柄が、ここにある。この箇所における神の祝福の中身は、**生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は地にふえよ**という、子孫の増加にあった。このように神の祝福が子孫の増加と結びつけられているのは、創世記では極めて一般的なことである(1:28、9:1、7、17:6、20、28:3、48:3-4 など参照)。むろん、このような祝福は人間に対してのものだった。しかし、預言者ホセアは、神が生き物と契約を結ぶとまで言っている。人間への祝福というコンテキストにおいてであるが、とても興味深い。

その日、わたしは彼らのために、野の獣、空の鳥、地をはうものと契約を結び、弓と剣と戦いを地から絶やし、彼らを安らかに休ませる。(ホセア 2:18)

神の祝福の内容は、むろん時代によって異なる。さらに、人によっても異なるだろう。しかし、ここで大切なことがある。その内容が何であれ、神からの祝福を受ける、そのこと自体である。神から祝福を受けることのできない人生など、空しい歩み以外の何ものでもない。

夕があり、朝があった。第五日。これは、五日目の空の鳥や海の魚の創造の終わりを告げる定型句である。

五日目を閉じるにあたり、先日散歩をしていたときの話をさせていただきたい。長い冬をじっとこらえ、やっと春が来たとはばかりに、川の土手にタンポポの花が咲いていた。45 年ぶりの大雪の後である。たった一輪だが、とてもかわいらしく咲いていた。そのときふと、空の鳥を見よ、野に咲く花を見よ、と言われたイエスの言葉(マタイ6:26、28)を思い出した。そして、歩きながら、被造物管理の神学について思いを巡らしていた。

福音派のキリスト教は、自然の中に神を体感したり、自然に基づく神学を展開することを極度に警戒してきた。そのような宗教体験の芽は自由主義神学の中に育てられたものだからである。神のこぼれを信ずる神学とは対立する。そんなふうに教えられてきた。その結果だろうか。聖書信仰からは、深みのある、感動に心踊らせるような神学は生まれてこなくなってしまった。思弁的で護教的な、何の面白みもない神学ばかりである。それでいいのだろうか。本当は、神学ほど、楽しく、心が解放され、勇気と希望を与えるものはないはずだ。神学がこんなふうに変わってしまったのは、いつからのことなのだろうか。被造物管理の神学が、もしそれと同じようなものなら、屋上屋を重ねる必要はない。そんな思いが堂々巡りしていた。

小1時間も歩いていただろうか。夕日が沈みかけていた。お寺の鐘が遠くで鳴った。まさに夕があった。

7. 第六日(創世記 1:24-31)

そして、朝になった。とうとう創造の最高潮、六日目がやってきた。人間が造られ、創造の完成する日である。ユダヤ人であれば誰でも、六日目は翌日の安息日に備え、特別忙しい日になることを知っていた。そのことは、神の創造のわざにおいても起こった。というより、創世記1章の著者は、自分たちの経験に合わせ、世界の創造のわざを描写したのだ。五日目は、軽いフットワークのような感じで終わった。その分だけ、そして七日目の分も含めて、六日目は大忙しになった。長い一日である。

神は仰せられた。「地が、種類にしたがって、生き物を生ぜよ。家畜や、はうもの、野の獣を、種類にしたがって。」そのようになった。(24 節)

神は、種類にしたがって野の獣を、種類にしたがって家畜を、種類にしたがって地のすべてののはうものを造られた。神はそれを見て良しとされた。(25 節)

神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」(26 節)

神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

(27 節)

神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」(28 節)

神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地の上にあつて、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる。」(29 節)

また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。」そのようになった。(30 節)

神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。夕があり、朝があつた。第六日。(31 節)

神がご自身の民イスラエルに初めて安息日について教えたのは、マナの出来事の時だった(出エジプト 16:5、22-30)。それは、十戒を受ける以前、やっとの思いでエジプトを脱出した直後のことである。カナンを目指して旅立ち、シンの荒野までやって来た。そこでとうとう、食物がなくなり、窮地に陥った。そんな彼らは、つぶやき嘆き、指導者を責めて怒り狂った。神は彼らにマナを備えた。そして、七日目を安息日として守るため、六日目には二倍のマナを集めよ、と命じた。以来六日目は、神の民にとっては一番忙しい日となった。

創世記1章の著者は、世界創造のわざを記録するよう神から命じられた。彼はもともと、安息日が神の創造のわざに基づいて定められていると示されていた。そこで彼は、自分が観察した周囲の世界を、六日間の神の創造のわざとして、同胞の民がよく分かるようにまとめた。この六日目の創造には、これまでの一日の働きの倍以上の仕事を終えている。六日目は、神にとっては、とても忙しい日であつた。七日目を前に、六日中に全仕事を完成させようと必死になっているかのようだ。このような書き方をしているのは、たぶん、神の民の安息日体験が反映されているのだろう。安息日神学の息吹が、このような記述方法にも表れている。

六日目の創造もまた、これまでどおり、**神は仰せられた**という常とう句をもって始められた。これは、神の語りかけとしては、七番目である。しかしこの神の語りかけは、この24節に加え、26節、28節、29節と六日だけで4回出てくる。これまで6回出てきたので、合計10回になる。7という数字を守りながら、同時に3をプラスして、10回にする。10は十全であることを示唆する。これもまた、すべてのものが神のことばによって造られたことを印象づけるための、特別な表現技法だった。

その語りかけの内容は、**地が、種類にしたがつて、生き物を生ぜよ。家畜や、はうもの、野の獣を、種類にしたがつて**という、長い命令だった。この命令は、逆順法(種類に従って—生き物、生き物—種類に従って)に基づく平行法によって記述されている。しかも、**地が…生ぜよ**という形式の表現は、11節(三日目)の「地が…芽生えさせよ」という句に類比される。三日目には、乾いた土地と植物が造られた。この六日目には、その土地に住む動物が造られる。六日目の創造は、明らかに三日目の創造に対応している。これによって、一日目と四日目、二日目と五日目、三日目と六日目とが、それぞれきれいに対応した形でまとめられた。

地が、生き物を生ぜよという表現は、地が動物の生命を生じさせたかのように聞こえる。11節の植物の場合も、この箇所動物の場合も、地が生命の起源であるかのような印象を受けるかもしれない。しかし著者は、そのような意図でこの文章を記述したのではない。神が、ご自身の命令によって、植物や生き物を地を土俵にして生じさせた、と伝えたかったのである。

進化論擁護のキリスト者が、この箇所を根拠に、神は一つ一つの動植物を直接ではなく、地を媒介にして間接的に創造され、生命の法則に基づいて生命継承がなされるよう定めた、と解説しているのを聞いたことがある。しかし、この記述を現代の進化論論争に絡ませて解釈するのはよくない。24節の繰り返しの文章を見ていただきたい。「地」は出てこない。自分の考えに合う(都合の良い)ところは引用するが、不都合に見えるところは無視する。そういう姿勢が、進化論者にも、反進化論者にも見られる。これでは、ものごとをきちんと考えようとする人々からは、見離される。進化を否定するにしても、肯定するにしても、科学が提起している問題は、科学の方法論によって解決しなければならない。他の情報を混入させると、問題を複雑にするだけである。

生き物とは、ここでは動物を指す。続く説明では、動物は三種類に分けられている。その最初は、**家畜(ブヘマー)**である。それは家で飼われているような動物を指す。二番目の**はうもの(ラメシュ)**は、足のないトカゲとか蛇の

ようなもの、三番目の**野の獣**(**ハイトー・アレツツ**)は、野原に生きる野生動物をいう。この大雑把な分け方は、当時の人々にとってごく普通のものであった。おそらく、身近にあって食べることのできるもの、身近にはあるが食べることのできないもの、そして、人間とは無関係に生きているものと、区別されていたのだろう。

種類にしたがっては、**ブヘマー、ラメシュ、ハイトー**の動物たちの間に見られる、それぞれの種類の動物を指している。羊は羊、ヤギはヤギ、豚は豚、ライオンはライオンといった、古代中近東の人々がごく普通に区分していた種類である。この言葉は、生き物の生命継承の秩序を述べている。神は、それぞれの生き物にそれぞれにふさわしい特色を与え、その位置と目的をもって創造された、ということなのである。預言者イザヤは、これらの生き物さえも、神を賛美していると伝えている。

野の獣、ジャッカルや、だちょうも、わたしをあがめる。わたしが荒野に水をわき出させ、荒地に川を流し、わたしの民、わたしの選んだ者に飲ませるからだ。(イザヤ 43:20)

神の語りかけの言葉は、**そのようになった**。神のことばの権威は、創造の記録全体をとおして貫かれている。我々は、繰り返しの部分については、もう分かっていると、読み飛ばしやすい。しかし、著者が繰り返すのは、重要だからである。単にパターン化して記述する、文学技法に過ぎないと扱わないでほしい。神のことばの背後にあるご計画やご意志の奥深さについて、しばし沈思黙考の時をもっていただきたいと思う。

続く、**神は、種類にしたがって野の獣を、種類にしたがって家畜を、種類にしたがって地のすべてのほうものを造られた**という文章は、神の語りかけどおりに、すべての生き物が造られたことを記述している。この 24 節は、野の獣、家畜、ほうものの三つを、三重の平行法によって表現している。美しい韻を踏んで描かれていることは、一読するだけで分かる。著者は、この世界創造の最終目標を人間の創造に置いている。それはそのとおりである。しかし、植物の世界でも、動物の世界でも、人間の舞台設定の一こまに過ぎない、と見なしてはいけな。それ自体で完結した目標をもっている、そういう側面もある。パウロは、被造物の贖いについても、言及している。全被造物に対する神の遠大なご計画については、今の人間にははかり知ることのできない面がある。

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。(ローマ 8:19-22)

種類にしたがってという言葉は、24 節では三つの動物を取り囲むように、そして 25 節では動物が一つずつ述べられるたびに、繰り返されている。この言葉は、(三日目の)植物の命の継承の時にも使われた。植物同様、動物もまた、親から子へと同じ生命を継承させていく。このような生命をもつものに対し、単にいのちの法則に従っている生き物だと、簡単に片づけてはいけな。現代科学の粋をもってしても、生命の神秘には未だ到達し得ないでいる。進化論に対しどのような意見をもっていても、キリスト者が神の創造のすばらしさに感動し、生命に対する畏敬の念をもち続けるのは当然である。

この 24 節の語りかけと 25 節の成就の文章には、動物におけるキアスムス構造が見られる。

- A 家畜とはうもの
- B 野の獣
- B' 野の獣
- A' 家畜とはうもの

神はそれを見て良しとされた。神は、動物の創造においても、是認を表明された。地上の動物の世界もまた、空の鳥や海の魚と共に、神による偉大な創造物だった。

ところで、生き物に対しては、神の祝福の言葉は記されていない。ある学者は、人間が造られるまでは、動物が増えることをよしとしなかったのではないかと推測している。あるいは、人間の祝福の中に動物の祝福も含まれるので、ここでは祝福の言葉は述べられていないという解釈もある。いずれにしても、神は動物たちに食物を備えられた(29 節)。それゆえ、生き物に祝福がなかったわけではない。

それでは、人間に関する創造を見て行くことにしよう。まず、26 節である。

神は仰せられた。

「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。

彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」(26 節)

神は仰せられた、これは、六日目の創造における二度目の語りかけである。動物の創造の後は、人間の創造が続く。この人間の創造によって、六日間にわたる創造のクライマックスを迎える。人間は、生物学的に言えば、動物の一種である。しかし、創世記の著者は、そう理解してはいない。人間を動物とは全く違う存在として描いている。どんな点が違うのか。①神のかたちに造られたこと(26-27 節)、②地を支配すること(26、28 節)、③男と女に造られたこと(27 節)、④より大きな祝福を受けたこと(28-29 節)の 4 点である。これらの点を中心に、人間の創造に迫ってみよう。

人間の創造を記述している 26-28 節には、次のようなキアスムス構文が見られる。

A 神の意思:生き物を支配させる(26 節)

B 神のかたちに造られる(27 節 a)

B' 神のかたちに造られる(27 節 b)

A' 神の祝福:生き物を支配させる(28 節)

人間の創造に関するキーワードは、「神のかたち」である。古代中近東の文献によれば、創造は神々のためになされた。ところが創世記の著者によれば、創造は人間のためになされた。驚くべき違いである。人間を、神を代表する存在として、あるいは神の代理者として、描いているのだ。

神は、**さあ人を造ろう**と言われた。この言い回しは、神が誰かに語りかけたように聞こえる。誰にだろう。ちょっと前に造った動物たちにだろうか？ それはありそうもない。彼らに言葉は通じないだろう。では、天使か？ それは、あまりに唐突である。誰かに語りかけたというのではなく、英語でいう Let's ...という表現であり、神の決意表明だったと解釈する人もいる。ということは、独り言？ そうかもしれない。でも私には、神の傍らに誰かがおられたのではないか、そんな印象を受ける。著者も最初の読者も理解できなかっただろうが、新約聖書にはその答えがある。イエスに、そして神の御霊に語りかけられたのではないだろうか、と。

中澤は、あるところでは最初の読者たちが理解できるように書いたはずだと言う。ところが、他の場所では、読者は理解できなかっただろうが、と断り書きを入れる。こういう矛盾した解釈はおかしい、そう批判される方がおられるだろう。そのとおりで、反論の余地はない。それでもあえて、私の信じることを言わせていただきたい。

創世記 1 章の著者も、最初の読者も、そこに書かれていることは基本的には理解できたはずである。しかし、神が啓示された部分の中には、分からないところもあったことだろう。何もかも神の啓示のせいにして、彼らが理解できないことが書かれているのだとするのは間違いである。だが反対に、神の啓示的内容を少しも認めず、理解できないことは何一つなかったはずだと、すべてを割り切ってしまうのもどうかと思う。

この辺の問題になると、キリスト者の間にも意見の相違がある。それは当然のことだ。だからこそ、胸襟を開き、自由、活発に議論したらよいと思う。

この箇所の人(**アダム**)には冠詞がない(次節 27 節には冠詞がある)。固有名詞だからというより、人類一般、あるいは人類の代表としての人間を指しているからだろう。**造ろう(アーサー)**という動詞は、次の 27 節の「創造する(バーラー)」ではない。言葉を変えているのは、意味が違うからではなく、いろいろな言葉を使って人間の重要性を強調する、一種の表現技法であろう。

神は、**われわれのかたちとして、われわれに似せて**人を造ろう、と言われた。ここで神は、**われわれ**と複数形を 2 度使っている。この神の複数形は、3 章 22 節や 11 章 7 節などにも見られる。イザヤ 6 章 8 節の「われわれ」という表現も似た用法である。神なぜ、ご自分のことをこのように複数形で語っているのか。聖書が初めから終わりまで一貫して教えようとしているのは、神は唯一であるという真理である。にもかかわらず、なぜ**われわれ**なのか。この複数形は、説明を要する。

ある聖書学者は、著者は多神教の資料を使ってこの記事を書いた、複数形はその名残りであると述べている。とすれば、著者は全く間抜けな人物となる。唯一の神の創造を教えようとしているのに、多神教の部分で修正するのを忘れた、というのだ。こんなうっかりミスをしてしまう著者がいたと信じることは、私にはとてもできない。しかもそれに気づいた読者も一人もおらず、修正する人もいなかったということになる。

その他、いろいろな説明が提唱されている。①神の中に語る神と語られる神の人格があるとか、②神は自問自答しながら自らを励ましているとか、③権威の複数形であるとか、④旧約聖書の中には、神が天使たちと会議を開

いていることを示唆する記録があるので(例えば、ヨブ 1:6-12、2:1-6、I 列王 22:19-23 など)、天上の天使たちを含めているのではないか(詩篇 89:6-7)とか……。

私自身は、この複数形に三位一体の神を読み取っている。この箇所「神のかたち」の解釈は、神の複数形を三位一体と解釈するとき、一番スムーズで、豊かなものとなる。それ以外の解釈は、極めて貧しい内容になる。しかも、神の霊は創世記 1 章 2 節で既に言及されている。2 章 7 節にも、人間創造の場面で出てくる。さらに、新約聖書は、キリストによる宇宙の創造について明瞭に啓示している(ヨハネ 1:3、コロサイ 1:15-17、ヘブル 1:2)。

著者と最初の読者は、この複数形をどこまで意識していたのか、どのように理解していたのか、はっきりしない。間違いなく、三位一体とは理解しなかっただろう。それでも私は、三位一体説がベストだと思う。

では次に、**かたち(ツェレム)**、および**似せて(デムート)**とは、何を意味しているのか。**ツェレム**は、旧約聖書に 17 回出てくる。そのうちの 10 回は、外形的な実体を表現した像、例えば、「石像」(民数 33:52)、「像」(エゼキエル 7:20)、「肖像」(エゼキエル 23:14)などを表わしている。一方**デムート**は、「人間の姿に似たもの」(エゼキエル 1:26)、「人の姿をとった者」(ダニエル 10:16)など、あるものの似姿を表わしている。一般的には、**デムート**は**ツェレム**に含まれる、といってよい。ただし、これらの言葉の語源や使用例などをいくら調べても、この箇所の「神のかたち」の内容は、明らかにならない。神学的な考察をとおして理解すべきことだからである。

キリスト教神学者は、今日までさまざまな解釈を提案してきた。①人間に特有な知性、感情、意志などの働き、②神に背くことさえできるような自由意志、③自意識やさまざまな人格(ペルソナ)、④道徳性や倫理性、⑤神と交わることのできる特質、祈りや礼拝などの宗教的能力や霊性、⑥永遠性をもつ霊、魂、不死性、⑦男と女の関係、愛の交流の能力や社会性、などである。これらは皆、他の動物にはない、人間を人間たらしめている特質である。

一般論ではあるが、私は、聖書解釈においては、あれかこれかではなく、あれもこれものがよいと思う。立派な学者たちが真摯に考えた結果、意見の違いが生じているのだ。従って、矛盾しない限り、どの意見も尊重すべきだと思っている。その意味では、「神のかたち」には、上記七点すべてが含まれている、と考えてよい。そして、これらに加え、さらにもう一つ、最も大切なことを加えさせていただきたい。それは、「被造物を管理する能力と責任」ということである。この点をこれから説明していきたいと思う。

26 節をもう一度読んでみよう。**彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。**ここで人間は、これまで神が創造してきたすべての生き物を支配するようにと命じられている。

さらに 28 節に進んでみよう。**地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。**ここには、ヘブルの平行法が見られる。つまり、「生き物を支配すること」は、「地を支配すること」に他ならない。「地を支配する」とは、具体的にはどういうことなのか。アダムにとってそれは、エデンの園を耕すことだった。「神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた」(創世記 2:15)。

創世記の著者は、「神のかたち」を被造物の支配権と結びつけている。この「神のかたち」と支配権の結びつきに関し、古代中近東の文献はよきヒントを与えている。紀元前 9 世紀頃の北メソポタミア(上シリア地方)から、「テル・ファクハリエ」という碑文が出土した。これは、古アラム語とアッカド語の二か国語の碑文である。そこには、次のような文章が彫り込まれている。

- (1 行) シカンのハドゥの前に設置された、ハドゥ・イシの彫像(ダムート)
(12 行) 彼の王座を励まし、継続するために、グザンとシカンとアズランの王ハドゥ・イシの彫像(ツァラム)
(15-16 行) 彼は、以前よりもより良いものとしてこの彫像(ダムート)をつくった。
彼は、シカンに住む、ハブルの主ハドゥの面前で、彼の彫像(ツァラム)を設置した。

この碑文は、王ハドゥ・イシの彫像に対し、「ツァラム」と「ダムート」の二つの言葉を使っている。しかも両語は、明らかに交換可能な言葉である。彼らの文化では、王は、神々の代理者として地上を治める者だった。その王の彫像に対し、**ツァラム**とか**ダムート**が使われていたのである。むろん、上記の文献だけではない。古代中近東の文献では、この用例のように、「神のかたち」は、王あるいは支配者に対してのみ使われている。他方、古代中近東の世界では、普通の人間は、神々や悪に翻弄される極めて低い被造物と見られていた。

創世記 1 章の著者は、このような古代中近東の文化をよく知っていた。にもかかわらず、神は人間を神の**ツァラ**

ム、あるいは**ダムート**として造られたと述べた。つまり、人間は高貴な王のような存在であり、支配能力とその責任を課せられている、と説いたのである。著者は、古代中近東社会の常識と神の啓示との間には明らかなコントラストがあることを、実に巧みに表現したのである。

支配せよ(ラーダー)という言葉は、「支配する」という訳語が一般的である(イザヤ 14:2、6、エゼキエル 29:15 など多数)。他には、「導く」(詩篇 68:27 など)、「指揮する」(Ⅰ列王 5:16、9:23、Ⅱ歴代 8:10)、「総べ治める」(詩篇 72:8)、「治める」(民数 24:19、詩篇 110:2)、「平和に、安心して住むことができるように支配する」(Ⅰ列王 4:24-25)、「酷使してはいけない」(レビ 25:46、53)などの訳語があてられている。

古代中近東の王は、ほとんどが専制君主的な王だった。しかし、聖書は、違った王のイメージを説いている。弱者に心を配り、愛と公平をモットーとする支配者である。

これは、彼が、助けを叫び求める貧しい者や、助ける人のない悩む者を救い出すからです。彼は、弱っている者や貧しい者をあわれみ、貧しい者たちのいのちを救います。彼はしいたげと暴虐とから、彼らのいのちを贖い出し、彼らの血は彼の目に尊ばれましょう。(詩篇 72:12-14)

聖書と古代中近東の王たちのイメージは正反対である。では、聖書の王や支配者のイメージは、いったいどこから来たものなのか。預言者エゼキエルは、イスラエルのリーダーたちに対し、神のような牧者(王)になることを求めた。神こそ、民を正しく、慈しみ深く治める王だった。

まことに、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。牧者が昼間、散らされていた自分の羊の中にいて、その群れの世話をするように、わたしはわたしの羊を、雲と暗やみの日に散らされたすべての所から救い出して、世話をする。わたしは国々の民の中から彼らを連れ出し、国々から彼らを集め、彼らを彼らの地に連れて行き、イスラエルの山々や谷川のほとり、またその国のうちの人の住むすべての所で彼らを養う。わたしは良い牧場で彼らを養い、イスラエルの高い山々が彼らのおりとなる。彼らはその良いおりに伏し、イスラエルの山々の肥えた牧場で草をはむ。わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らをいこわせる。——神である主の御告げ——わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものを力づける。(エゼキエル 34:11-16)

人間は、ここに記されているような神の姿を反映し、被造物を支配するようにと造られた。ところが従来のキリスト教神学は、人間の堕落のみを強調し、王としての存在である人間の高貴さにほとんど目をとめてこなかった。その結果、神が人間に被造物の管理責任を委ねられたことをすっかり忘れてしまった。キリストの贖いが語られても、イエスの神の国のメッセージを聞いても、人間の被造物管理権と結びつけられることはなかったのである。

では、引き続き、27 節に進もう。この 27 節を直訳すると、次のようになる。

神は人を創造された、ご自身のかたちとして。

神のかたちとして、神は彼を創造された。

男と女とに、彼は彼らを創造された。

この三つの文章は同格である。最初の二つの文章はキアスムス構文(創造—神のかたち、神のかたち—創造)を示している。三つ目の文章は、二つの文章の中身をさらに深め、男性と女性の同格性を強調している。と同時に、28 節で人類が増え広がっていくことの伏線になっている。

創造された(バーラー)は、既に 1 節の「天と地の創造」と、21 節の「海の動物の創造」において使われた。この箇所は三度目であるが、特別三度も繰り返されている。これは、この創造記録の中心が人間にあったことを強烈に印象づけている。前節 26 節では「造る(アーサー)」が使われていた。5 章 1-2 節においても、このようにアーサーが 1 度、バーラーが 3 度という組み合わせが見られる。いずれにおいても、人間が創造の頂点にあることを強調した、巧みな表現技法である。

神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。この文章によれば、「神のかたち」は、男女に造られたことに関係がありそうである。40 年以上も前のことである。「神のかたち」とは、人間が男と女に造られたことと関係がある、人間の愛の交流、社会性こそが「神のかたち」である、というバルトの解説を読んだ。その読みの深さに大きな衝撃を受けたことを、今も、昨日のこのように覚えている。

被造物支配は、一人で行うものではない。助け手が必要である。だから神は、男に女を備えてくださった。それ

は、結婚の奥義に通じ(創世記 2 章)、家族に展開され(創世記 4 章)、教会の奥義を表わす(エペソ 5 章)。これらすべては、人が「神のかたち」に造られていることに基づいているのである。

続く 28 節は、「人間に対する神の祝福の言葉」を述べている。

神は彼らを祝福された。

神は彼らに仰せられた。

「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

人間を創造された後、**神は彼らを祝福された**。神のかたちに造られた人間が神の祝福を受けるのは、当然かもしれない。しかし、この祝福は、人間だけではなく、安息日(2:3)にも与えられている。「祝福する」という言葉は、創世記では、アダム(5:2)、ノア(9:1)、アブラハム(12:2-3、22:17-18、24:35)、サラ(17:16)、イサク(25:11、26:3-4、26:12、24、29)、ヤコブ(28:14、32:29)、ヨセフ(49:24-26)などにも使われている。特に、アブラハムへの祝福は、全人類への祝福を射程に置いた、遠大なものだった。

そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」(創世記 12:2-3)

この祝福の言葉は、22 節のすべての生き物に対して語られた祝福の言葉と、基本的に同じだった。ただし、二つの違いがあった。一つは、**神は彼らに仰せられた**と、造られた人間に神が直接語りかけられたことである。人は、神が直接語りかけることのできる相手だった。他の生き物は、神から直接語りかけられることはなかった(旧約聖書には全く例外がないというわけではない)。

二つ目は、**生めよ。ふえよ。地を満たせ**、と神が人に語りかけ、**地を従えよ**と命じたことである。22 節では、魚は「海の水に満ちよ」、鳥は「地にふえよ」と、祝福の言葉を受けていた。しかしここでは、「満ちる」と「地」という、両方とも大きな言葉が取りあげられ、**地を満たせ**とより大きな祝福の言葉になっている。古代中近東のアトラハシス叙事詩には、人が増え、問題や騒々しさが増えることを嫌う文章が出てくる。これに対し創世記 1 章では、神は人が増加するよう祝福の言葉を与えている。

続く、**海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ**という命令は、直前の「地を従えよ」との平行句と受け止め、**地を従えよ**の繰り返しと読むのが自然である。**海の魚、空の鳥**は、五日目の被造物である。**地をはうすべての生き物**は、六日目の被造物である。これらの言及は、二日間にわたって造られたすべての生き物をカバーしている。最初の**地を従えよ**は、地のすべての生き物を**支配せよ**という命令を含んでいる。

では、29 節に進もう。ここでは、神が人に食物を備えたことを述べている。

神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地の上にあつて、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる」

そして続く 30 節には、神が生き物に食料を備えたことを述べている。29 節の人間に対する祝福と比較して考えるため、続けて引用しておこう。

「また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。」

メソポタミアの文献では、神々に食物を備えるための存在として、人間は造られている。聖書の神は、そうではない。神が人間に、そして生き物に、食物を用意してくださるのである。ただし、人間には、他の生き物とは違う点が三つある。

まず、**見よ。わたしはと**、人間の食物を備えるのに、神ご自身が特別深く関わっていることを強調している。

第二は、**全地の上にあつて**と、人間が全地球上に増え広がっていくことが想定されている。他の動物たちも、増え、広がっていくことは約束されている。しかし、全地というところまでは言われていない。

第三は、動物たちには、**すべての緑の草**のみが食物として与えられた。それに対し人間には、**種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木**が食物として備えられた。

第三の点に関し、キリスト者の間に意見の違いがある。あるキリスト者は、この 1 章の段階では、人間に食物として与えられたのは植物のみで、動物の肉を食することは許されていなかった、それが許されるようになったのは、洪水以降のことである(9:3)、と考えている。

しかし、他のキリスト者は、神はアダムとエバのために「皮の衣」を備えていた(3:21)、アベルは羊を飼う者となり、犠牲をささげていた(4:2)、ノアは「きよい動物」と「汚れた動物」を区別して、箱舟に入れている(7:2, 8-9)などという点を取り上げ、人間は洪水以前より動物の肉を食べていた、と解釈している。もしこのように理解する場合は、「生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた」(9:3)という文章は、人間が動物の肉を食べることを、神が批准された、という意味になる。

洪水以降、人間は動物の肉を食べることを許されたのだから、どちらの解釈をしても、今となっては大きな違いはない。ただ、聖書解釈という観点からは、興味深い問題である。講演をお聞きの皆さんは、どちらの意見に賛成されるだろうか。

神の祝福の言葉は**そのようになった**。創造に関わる言葉であっても、祝福に関わる言葉であっても、それが神のことばである限り、必ず成就する。著者は、この言葉を繰り返すことによって、創造は、神の言葉によったのであり、神のことばは絶対的な権威をもっていることを知らせようとした。

六日間の創造は終わった。そこで、**神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった**。神はそれまで、毎日その日の創造物をチェックしてきた。しかしこの最終チェックは、三つの点で、日々のチェックとは違っていた。一つは、**すべてのものを見られた**ことである。毎日のチェックは、それぞれ部分的なものだった。一つ一つの部分はよくできていても、全体としてはどうも・・・、ということは、よくある。部分もよく、全体もよくなければ完全とは言えない。神はここで、この世界全体が人間存在のためにうまく機能していることを確認された。

二つ目は、神が**見よ**と語りかけられたことである。語られた相手は、いったい誰か。神と交流する能力をもつ人間だと考える人が多い。しかし、私自身は、違和感を覚える。むしろ、聖書は、被造物全体を擬人的に扱い、しばしば被造物に呼びかけている。ここも、全被造物に神の創造のわざを喜んでもらおう、そういう気持ちが込められ、呼びかけられたものではないだろうか。詩篇の作者はしばしば、「全地よ」と呼びかけ、神への賛美をささげるよう励ましている(詩篇 66:1, 98:4, 100:1)。

そして三つ目は**非常に良かった**と、**非常に**という言葉が付け加えられていることである。神が造られたこの世界は、これ以上のものは不可能というほど、最高の完成品だった。我々は、神が造られたのだから、すべてがよくできて当たり前、そんなふうに考えやすい。すると、感動や喜びは小さなものになってしまう。この被造世界は、実によくできている。宇宙を知れば知るほど、驚嘆せざるを得ない。電子顕微鏡で見ても、世界最大の望遠鏡で見ても、その感動は増幅する。神は人に、創造の御業のすばらしさを共に喜ぶようにと招いている。

そして、最後の定型句、**夕があり、朝があった。第六日**が続く。二日目から五日目は、定冠詞がない(英語で表現すると, day, Xth となる)。しかし、この六日目には定冠詞がついている(英語でいうと day, the sixth)。次の七日目も定冠詞がついているが(day, the seventh)、それは安息日で特別の日だからである。この六日目に定冠詞があるのは、創造の最終目標が人間の生存にあり、それが実現した特別な日という意味が込められている。

8. 第七日(創世記 2:1-3)

聖書の章とか節の区切りは、中世につけられたものである。世界創造は、六日間で完成された。これで一区切りとなり、七日目の神の安息は別の話である、そう考えて新しい章をスタートさせてしまった。1 章と 2 章の区切りを六日目と七日目の間に置いてしまった気持ちも、分からないでもない。しかしこれは、明らかに知恵足らずだった。2 章 1-3 節には、「第七日目」という言葉が三度も繰り返されているのだから、1 章の流れの中で、2 章 3 節までをひとまとめにすべきだった。

こうして、**天と地とそのすべての万象が完成された**。(1 節)

神は第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた。すなわち第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。(2 節)

神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。(3 節)

七日目の記録は、これまでの六日間とは、かなり違った書き方をしている。「神が仰せられた」という創造のわざを表わす言葉は出てこない。「そのようになった」という創造が実現したことを表わす言葉も、「よしとされた」という神の是認の言葉も、「夕があり、朝があった」という一日の締めくくりの常とう句も出てこない。しかし、1章の六日間のわざを締めくくる七日目であることは間違いない。

創世記1章1-2節は六日間の創造の序論だった。2章1-3節は、その序論に対応する結論である。序論の部分の静けさが再び戻り、この結論部分を覆うことになった。何かが始まる前の沈黙が、すべてが終わったという沈黙に変わったのである。もはや、神の語りかけも、神の御業も、神の是認も、神の祝福の言葉も聞こえなくなった。神が休まれた。創造の大激動は、平和な静粛に取って代わった。

著者は、序論の1章1節をヘブル語で7語、2節を14語、序論全体を21語でまとめた。それに対応する結論部分の2章1-3節は、7語からなる3つの文章を含め、合計35語でまとめている。前者が7×3、後者が7×5で、6日間の創造の業の結果、7×2が増えたという計算になる。

1節の**こうして、天と地とそのすべての万象が完成された**は、六日間の創造の結末を描写した文章である。この文は、創造の初めの文章、「初めに神は天と地とを創造した」(1:1)に対応している。しかも、両者の間には、キアスミス構文(創造—神—天と地が、天と地—万象—完成)が見られる。

神による創造の六日間は終わった。1章1節では「天と地」のみだった。それに対し、ここでは、**そのすべての万象**という句が加えられている。この句こそ、茫漠としていた地が、人の生存舞台へと変えられた世界を示す「端的な言葉」であった。**万象(ツェバー)**は、全体が秩序だって動いている集団を指す言葉である。聖書では、軍隊(21:22)、星(申命記4:19)、天使(Ⅰ列王記22:19)などに対して使われている。造られたもののすべては、あるべき位置に組み立てられ、秩序だって動き、期待された機能を完璧に果たすようになったのである。「トーフーとボーフー」(1:2)が、**ツェバー**に変わったのである。

完成されたと言われると、我々は創造された被造物の方に関心を抱く。しかし著者の意図はそこにあるわけではない。造り主である神ご自身にフォーカスが当てられている。古代中近東の人々は、世界の成り立ちや構造にはほとんど興味をもっていなかった。むしろ、この世界を支配している神々は誰なのか、ということに関心をもっていた。預言者イザヤが、神ご自身を世界の創造者であると繰り返し宣言したのは、このような背景があったからである(40:25-26、45:7-8、12、18、48:12-13など)。

イザヤだけではない。そのことを示す聖句は聖書全巻に満ちている。例えば、「天と地を造られた方、いと高き神」(創世14:19、22)、「あなたが天と地を造られた」(Ⅱ列王19:15、イザヤ37:16)、「天と地とお造りになったイスラエルの神、主」(Ⅱ歴代2:12)、「主は、天と地を造られた方」(詩篇115:15)、「主は天と地と海とその中のいっさいを造った方」(詩篇146:6)、「あなたは大きな力と、伸ばした御腕とをもって天と地を造られました」(エレミヤ32:17)、「天と地と海とその中のすべてのものを造られた方」(使徒4:24、14:15)、「天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物」(黙示録5:13)、「天と地と海と水の源を創造した方」(黙示録14:7)などである。エレミヤは、「天と地との諸法則」を定めたのが神であり(エレミヤ33:25)、偶像是「天と地を造らなかった神々」と呼ばれている(エレミヤ10:11)。

六日が終わり、新しい七日目を迎えた。その七日目に、神は三つのことをされた。一つは、**なさっていたわざの完成を告げられた**ことである(2節a)。二つ目は、**なさっていたすべてのわざを休まれた**こと(2節b)、そして三つ目は、**第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた**ことである(3節)。一つ一つの文章を丁寧に見ていくことにしよう。

まず、**第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた**という文章である。**なさっていた**というと、第七日目にも神は働いていたかのような印象を受ける。原文を直訳すると、そう読めないわけではない。しかしそう読むことは著者の意図ではない。六日間に神がなさったわざの完成を、七日目に宣言したというのが真意である。**わざ(メラカー)**とは、熟練工がすべての思いを注ぎ込んで作品を作り上げていくときの言葉である。旧約聖書では、普通の労働者の働きに対しては「アボダ」という言葉が使われた。**メラカー**の方は、特殊な能力と技術をもっている職人が、他の人が真似できない特別な製品を仕上げていく作業を指す。**完成(カーラー)**とは、もはやこれ以上は手の入れようのない、完全な状態をいう。六日間の創造によって、人間が生存するのに必要な環境は完全に整えられ

たのである。

むろん、いったん完成された被造物も、それぞれの歩みを進めていく。自然は、与えられた法則性にに基づき、その活動を展開する。不確定な要素もたくさんあるが、それは、人間の認識能力を超えた世界である。そのような領域にまで、人間は首を突っ込まなくてもよい。人は「神のかたち」に造られても、神ではない。それぞれの生き物もまた、生命の法則性に従い、生命の継承を繰り返す。生き物たちも、人のもつ自由意思とは異なるが、それなりの意思をもっている。動物の世界をじっくり観察するなら、彼ら特有の興味深い能力をたくさん発見することができる。そういうことをすべて含め、創造は一応の完成となった。

二番目の文章に移ろう。**第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた**。この文章もまた、誤解されやすい。**なさっていたすべてのわざ**というと、神は七日目にもわざを行っていたかのように勘違いしてしまう。むろん、著者の言いたい趣旨は、これまで六日間にわたってなさったわざを、この七日目には休まれた、ということである。

休まれた(シャバット)という言葉は、旧約聖書に 207 回出てくる。「シャバット」の語源は「休む」とか「安息する」である。日常の生活のリズムから離れて休むことが安息日の原義である。働くことから解放されることが休みとなる。人間はどんな人でも、仕事をすれば疲れる。仕事を趣味のように楽しんでいる人も、やはり疲れ、休みを必要とする。しかし、神はそのようなお方ではない。疲れることはない。その意味では、**休まれた**という訳語は、神にとってはふさわしい言葉ではない。この語は、一つの仕事が終わりと、それとは全く違う状態に置かれている状態を指す。つまり、神は、六日間の創造のわざを終え、その業に基づいた新しい働きを始められたということである。

続けて、三番目の文章に進もう。**神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた**。神は、六日目には人と動物を祝福した。その祝福は、子孫が増え広がっていくことに関係していた(創世 1:22、28)。しかし、ここでは、**神は第七日目を祝福**している。祝福の対象が**第七日目**と、日にちであることは、極めて珍しい。この神の祝福の中身は、**この日を聖であるとされた**ということだった。**聖である(カドーシュ)**の語源は「切断する」である。そこから、聖書では、あるものを、神以外のすべての物から切り離し、神にのみ属するものとして扱うという、特殊な用語になった。新改訳では、「聖別する」という特別な訳語をつくり、この語に充てたほどである(出エジプト 28:38、29:1、29:27 など 31 回)。

この日を聖であるとされたとは、神は「第七日目」が神に属するものと宣言されたということである。これまでの六日間、神は人間を最終のゴールとし、創造のわざを続けてきた。この七日目は、そのすべてのわざを休み、その日を神ご自身のために使っている、ということである。

3 節後半の**それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである**は、神が「第七日目を聖であるとされた」ことの付加説明である。この神の説明文を、ほとんどのキリスト者は理解していない。**すべての創造のわざを休まれた**という言葉は、神は何もしていないで休んでいると解釈してきたからである。このような誤解が生じたのは、「休む(シャバット)」という訳語にあったことは、既に述べた。神は、六日間で創造のわざを完成した。七日目は、すべてのわざを休んだ。休んだと言っても、神は働き過ぎて疲れた、というわけではない。創造の業から完全に離れた、ということである。離れてどうしたのか。創造のわざとは違う働きを始められたのである。

もう少しわかりやすく説明しよう。もし、「もう休もうか」とか、「おやすみなさい」と言うなら、何もしないで眠るという意味である。しかし、明日は「休みだ」とか、「学校は休みだ」というと、「眠る」という意味ではない。「今は忙しい時だから休めない」とか、「今度の連休はどこに行こうか」といえば、仕事から解放され、仕事以外のことをする、という意味である。この箇所では神が**休まれた**と言われたのも、これまでの六日間の創造のわざとは違う働きをしている、ということである。

イスラエルの民にとって、安息日の戒めはとても重要なものだった。それは、六日間働き、七日目には、体をゆっくり休める、そういう戒めではなかった。安息日の戒めの最後は、「主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された」(出エジプト 20:11)という言葉で締めくくられている。安息日は、聖なるもので、神に属する日なのである。イザヤ 58 章 13-14 節によれば、安息日とは「主の聖日」であり、「神を喜ぶ日」である。イスラエルの民は、安息日には、神を思い、神に祈りをささげ、神を礼拝するために集いあつた。彼らは、仕事から解放され、神にお仕えたのである。

神は、六日間の働きを終え、その創造のわざに対し新しい関係に入られた。それが、**この日を聖であるとされ**

たということの意味だった。では、**この日**、つまり七日目とはいつのことか。創世記2章1-3節には、「夕となり、朝となった」という定型句が出てこない。多くの聖書研究者は、この七日目は、今も続いていると考えている。

イエスは、「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです」と言われた(ヨハネ 5:17)。イエスは、父に見習って働かれた。しかも、その働き方についても興味深いことを述べている。「子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです」(ヨハネ 5:19-20)。イエスは、神の働きを見ながら働くと言われた。まさに、神は今も働いているのである。

では、どのような働きなのか。創造のわざとは違う。その延長線上のわざである。贖いのわざである。神は、造られたものを、完全に贖われるために、今も働いている。そしてその働きに、我々キリスト者を、神の国の民として招いてくださったのである。

おわりに

我々は、創世記1章の著者が、本当に言いたかったことはどのようなことだったのか、その問題を追究してきた。今回の講演は、この辺で終わらねばならない。しかし、まだまだ考えねばならないことがたくさんある。このことは、次週の講演でさらに深めていく。最後に、この講演が、従来の創世記1章の解釈と異なる点について、はっきりさせておこう。次週の講演は、以下の点を前提に進めていくことになる。

第一は、創世記1章は、「宇宙の創造」ではなく、「世界の創造」に関する啓示だということである。多くのキリスト者は、創世記1章は、神は、宇宙の創造の出来事を、それが起こったとおりに啓示してくださった、と思っている。その結果、歴史的、科学的に正確な記述だと、考えている。しかし、そのような前提に立って創世記1章を読むと、たくさんの矛盾が生じる。その前提を変えねばならない。創世記1章の著者が、自分の生活体験に基づいた世界を、聖霊に導かれて書き記した、と。

第二は、著者は、古代中近東に生きた同胞イスラエルの民に、彼らが理解できるように記述した、ということである。神の民は、多くの点で、古代中近東の人々の文化を共有していた。神への信仰にとって対立するような事項は、避けねばならない。しかし、そうする必要のないものもたくさんあった。著者は、そういう事柄についてはそれをそのまま受け入れ、啓示の手段として用いた。そうしない限り、同胞の民と有効なコミュニケーションを取ることはできなかった。

第三は、安息日神学でまとめたことである。神は十戒の安息日の戒めの中で、六日間働き、七日目に休まれたと啓示された。その啓示に基づき、著者は、自分の見る世界を六日間の働きに割り振りながら記述した。古代中近東の人々は、宇宙の起源や生成過程については関心をもっていなかった。彼らは、どの神がどの領域を支配しているのかという点を問題にしていた。そういう背景を共有していた神の民イスラエルに、著者は創造の記録を書いたのである。

第四は、表現技法を巧みに駆使したことである。普通、創世記1章は、散文体であると言われる。その結果、歴史的な出来事が、忠実に描かれている、と考えられてきた。しかし著者は、ヘブル詩の平行法、三連詩、言葉遊び、キアスムス構文などの文学的な技法をふんだんに使っている。全体をきれいに7の数になるようにまとめたり、5+2で7になるようなイレギュラーな方法など、著者特有の表現技法を巧みに織り交ぜながら筆を進めている。この創造の記録は「詩的散文体」と呼ばれるほど特異なもので、従来の文学類型では当てはめきれない文書だと言ってよい。

第五は、神からの啓示的内容を、神の創造のわざに調和させながら見事に描写している、ということである。唯一の神と被造物との関係、創造のわざの進め方、神の霊の活動、三位一体的奥義、人間の本性と使命、安息日と神のわざの関係などは、神の啓示なくしては知りえないことだった。著者にとっても、時に理解しがたいことはあったことだろう。そういうことであっても、著者は示されるままに記したのである。